

遊佐町埋蔵文化財調査報告書 第8集

k-371

小山崎遺跡

—KOYAMAZAKI SITE—

第15次発掘調査報告書

2009.3

山形県遊佐町教育委員会

こ や ま ざ き
小山崎遺跡

第15次発掘調査報告書



(1) S = 1/1



1 遺跡遠影(○が調査地点 ←西)



2 航空写真(囲みが遺跡)
「国土画像情報:国土交通省」S51撮影



3 調査区全景(上: I区、下: II区)



4 竪穴住居:ST2(←南)



5 複式炉:EL1(←西)



6 ST2床面の柱穴と周溝のプラン確認(←南西)



7 ST2の柱穴と土坑プラン確認(←南)



8 EU2精査(←東)



9 ST3確認状況(←南)



10 EU2(←東)



11 主要土器(1)



12 主要土器(2)



13 注口土器



14 土偶
S=1/1

序

本書は遊佐町教育委員会が発掘調査を実施した、小山崎遺跡の第15次発掘調査成果を報告するものです。

小山崎遺跡は山形県の北西部、秋田県と境を接する遊佐町吹浦に所在します。西方の吹浦遺跡と共に古くから知られる縄文遺跡です。仰ぎ見る標高2,236mの鳥海山麓は豊かな森と湧水を抱き、人類の足跡は懐ノ内F遺跡で後期旧石器時代前半期まで遡ります。遺跡の分布は、山麓部の縄文時代と平野部の古代の内容が特徴的です。深い自然環境と海上交通の要衝としての位置の他、出羽国一ノ宮、大物忌神を有し、律令国家の出羽国政が反映した証しです。

遺跡の低地部には通常は残らない縄文時代の動植物遺存体を伴う地層が、現水田面下の海拔0m以下にまで良好に保存されていることが判明しています。早期末～晩期前葉に至る約3,800年の時間幅を持つ低湿地遺跡は、東北日本海側では現段階で確認されていません。昨年の調査では低湿地部に近い山麓の南向傾斜面から縄文時代中期終末の複式炉を持つ住居跡が確認されました。平成20年度は住居の存在密度を把握する目的を持ち調査に臨みました。結果、同時期の竪穴住居が複数軒見つかり、増築の痕跡も明らかになりました。内1軒は住居内の柱配置などの詳細な状況を掴むに至り、将来の復元、活用面でのデータを得ました。南面する傾斜面の一角に、縄文時代の中期終末期の集落立地を証明できた意義は大きく、過去の試掘で判明した台地上のやや古手の村である柴燈林遺跡から集落が移転してきたと考えられます。

集落の存続期間の長さが特徴の小山崎遺跡で、中期の中頃から終末期にかけての集落の立地を語ることが可能になりましたが、同時に後続する後期の集落の様相についての課題があります。今年の調査区の西側では過去に後期の遺物と遺構が若干確認されています。特に15次調査の隣接地は土層の堆積が良好で、集落が出土する可能性が濃厚です。この部分の調査を通して、本遺跡の中期中葉～後期に至る集落変遷の情報を得たいと考えます。遺跡内でも屈指の土層の厚みがあるため、遺構の良好な状況で姿を現すことに期待したいところです。

この度、遺跡の重要な構成要素の1つ、鳥海山大物忌神社にともなって丸池神社の池と社叢も国指定史跡となり、長く保存管理されることになり、遺跡内の自然環境保全で大きな前進となりました。環境との調和を第一に考え、文化財行政に有効に活かす必要があります。

最後に、発掘調査・整理作業及び報告書作成に御協力を賜った関係各位に心から感謝申し上げますと共に、本書が埋蔵文化財の保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動等の一助となれば幸いです。

平成21年3月

遊佐町教育委員会
教育長 小田島健男

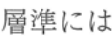
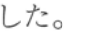
例 言

- 1 本書は遊佐町教育委員会が実施した遺跡の第15次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は町教育委員会が主体となり、国庫補助を受けて実施する継続事業の4年次となる。
- 3 発掘調査は住居跡の検出を目指す山麓傾斜面の第Ⅰ・Ⅱ調査区（計136㎡）で実施し、加えて遺跡北端を把握する目的の小規模分布調査（試掘坑×7ヵ所：計7㎡）を行った。調査面積の総計は143㎡である。
- 4 調査現地は鳥海国定公園第三種特別地域に属する為、調査は自然公園法第13条第3項の規定により県知事より許可を得て実施した。
- 5 現地調査は平成20（2008）年7月15日に開始し、10月25日に終了している。実働は52日間であった。期間中、9月17・18の両日には渡辺丈彦氏（文化庁記念物課）の現地調査指導を受けた。10月18日（土）には現地説明会を実施して成果を公開している。
- 6 整理作業、報告書執筆は平成20年10月27日～平成21年3月に実施した。
- 7 発掘調査の体制は、主体の遊佐町教育委員会が小山崎遺跡調査指導委員会を組織して、実際の発掘・整理・報告書作成までの実務にあたった。体制は下記の通りである。（敬称略）

調査総括 小田島健男（遊佐町教育委員会教育長）
主任調査員 佐藤禎宏（日本考古学協会会員）
調査員 大川貴弘（教育委員会生涯学習係主事）
調査指導 文化庁文化財部記念物課・山形県教育庁文化遺産課
現地指導 渡辺丈彦（文化庁記念物課 埋蔵文化財部門 文化財調査官）
調査指導委員 渋谷孝雄（山形県教育庁文化遺産課 課長補佐）
阿部明彦（山形県教育庁文化遺産課 埋蔵文化財専門員）
事務局長 楯形修一（遊佐町教育委員会教育次長）
事務局 小林栄一（次長補佐兼生涯学習係長）
齋藤智恵子（同係主事）
発掘調査作業員
安部徳朗 太田桃子 小野寺博喜 小松美登子 後藤 守 佐藤静雄 菅原二郎
高橋 艶 富樫榮吉 鳴瀬敏勝
生涯学習係臨時職員 土門加代子

- 8 本報告書の作成と編集は、佐藤禎宏と大川貴弘が協議し、執筆は、第Ⅳ章の佐藤以外は
大川貴弘が担当した。全体については佐藤が監修した。
- 9 整理作業全般で、太田桃子・小松美登子・土門加代子が佐藤と大川を補佐している。掲載
写真は空中写真を除き大川が撮影した。
- 10 現地調査から報告書作成にあたり、文化庁文化財部、山形県教育庁文化遺産課からご指導
とご協力を賜った。渡辺丈彦氏（文化庁記念物課文化財調査官）からは、現地にてご指導を
受けた。調査指導委員の渋谷孝雄、阿部明彦両氏には現地指導の他、調査全般で適切な指導
を頂戴している。
- 11 現地の地質学的な様相と出土石器の石材同定については、柴橋敬一氏（日本火山学会会員）
よりご教示を賜っている。
- 12 調査の記録と遺物は、遊佐町教育委員会が一括して保管している。
- 13 委託業務は次の通りである。
調査地の基準杭の設定と周辺地形図作成・空中写真撮影：有限会社アース測量

凡 例

- 1 検出遺構と遺物の登録は、下記の分類記号を用いて番号をそれに付している。
ST…竪穴住居 SK…土坑 SD…住居跡内溝 SX…性格不明遺構 SP…柱穴・ピット
EL…複式炉 EU…埋設土器 RP…土器・土製品 RQ…石器・石製品
- 2 調査区は正方位のグリッドに基づいて区割りしている。グリッドのY軸は真北を示す。
調査区平面図には日本測地系の座標数値を記載している。
- 3 遺構図の傾斜面はTTのケバで表現しているが、緩やかな傾斜部分はTを使用した。
- 4 調査区設定地区は、50cmコンターで作図した詳細地形図を用いている。
- 5 調査記録時は、遺物個々の出土位置について、要所にベンチマーク（B・M）を設置し、
絶対標高で記録した。平面記録では2メートル四方の小区に細分するグリッド法を併用した。
- 6 調査は保存目的のため、遺構保全を最優先し、遺構個々で（1）遺構確認面でのプラン確
認、（2）限定的な部分掘下げ（50%、25%等）の方法から選択し、保存に留意している。
- 7 調査時はデジタルビデオ撮影も写真撮影と併用して実施した。
- 8 採録した地形図、調査の平面図・層序断面図の縮尺はスケールとともに付記している。ト
レンチならびに調査区壁面断面図は1/80、遺構実測図は1/20・1/40・1/80で採録した。
土器の実測図は1/4、拓影・土製品は1/3を原則としている。石器の実測図は打製石器・
磨製石器・石製品が1/2、礫石器など大型の遺物は1/3の縮尺で掲載している。写真の縮
尺は不統一である。
- 9 調査区断面図で、住居跡覆土にはを使用し、崩落土の層準にはを使用した。
その他の挿図中に用いたスクリーントーンの用法は各図に示した。
- 10 掲載した遺物には通し番号を用い、実測図や拓影図と写真の同一個体は同一番号とした。
挿図と写真図版は対応関係を示している。図版の遺物番号には出土位置を付した。
- 11 層序はすべて算用数字で表記している。
- 12 石器属性表の石材同定は、磨製石器・石製品は柴橋敬一氏の肉眼的観察による。打製石器
については、大川の判別による。
- 13 土層断面図で用いた色調の記載は『新版標準土色帖（2006年版）』（農林水産省農林水産
技術会議事務局監修）による。
- 14 本文では関連機関について次のような略称を使用した。
文化庁文化財部：文化庁、山形県教育委員会：県教委、遊佐町教育委員会：町教委
山形県埋蔵文化財センター：県埋文、山形県立博物館：県博

発掘調査から本書の作成の過程で、下記の諸機関・諸氏よりご指導・ご協力を賜った。
記して感謝申し上げます。（敬称略）
鳥海山大物忌神社 土地所有者各位 山形県庄内総合支庁 遊佐町シルバー人材センター
箕輪鮭漁業生産組合 岡村道雄 佐藤正俊 菅原哲文 畠中六左エ門 福井淳一

目 次

序 文	i
例 言	ii
凡 例	iii
目 次	iv

第 I 章 遺跡の環境と調査	
1 遺跡の立地	1
2 調査の経過	2
第 II 章 本次の調査	
1 調査の目標	5
2 調査の内容	5
第 III 章 調査の結果	
1 第 I 調査区の調査	7
2 第 II 調査区の調査	8
第 IV 章 成果と課題	10
報告書抄録	巻末

巻頭図版目次

巻頭図版 1	航空写真
巻頭図版 2	調査区全景
巻頭図版 3	第 I 調査区の遺構検出状況
巻頭図版 4	第 II 調査区の遺構検出状況
巻頭図版 5	注口土器と土偶
巻頭図版 6	主要土器

表目次

第 1 表 出土遺物集計表	11
第 2 表 掲載石器属性表	13

挿図目次

図 1 小山崎遺跡周辺の地形と遺跡	1
図 2 遺跡の地形と調査区	4
図 3 調査区の配置図	6
図 4 第 I 調査区と旧 4 T の層序	15
図 5 第 II 調査区の層序	16
図 6 第 I・II 調査区の遺構配置図	17
図 7 ST2 竪穴住居跡の実測図	18
図 8 ST3 竪穴住居跡の実測図	19
図 9 ST2 と周辺の出土遺物	20
図 10 ST3 と周辺の出土遺物	21
図 11 第 I 調査区の出土土器・土製品 (1)	22
図 12 第 I 調査区の出土土器・土製品 (2)	23
図 13 第 I 調査区の出土土器・土製品 (3)	24
図 14 第 I 調査区の出土土器・土製品 (4)	25
図 15 第 I 調査区の出土土器・土製品 (5)	26
図 16 第 II 調査区の出土土器・土製品 (1)	27
図 17 第 II 調査区の出土土器・土製品 (2)	28
図 18 第 II 調査区の出土土器・土製品 (3)	29
図 19 第 I 調査区の出土石器 (1)	30
図 20 第 I 調査区の出土石器 (2)	31
図 21 第 II 調査区の出土石器 (1)	32
図 22 第 II 調査区の出土石器 (2)	33
図 23 第 I・II 調査区の出土石器	34

写真図版目次

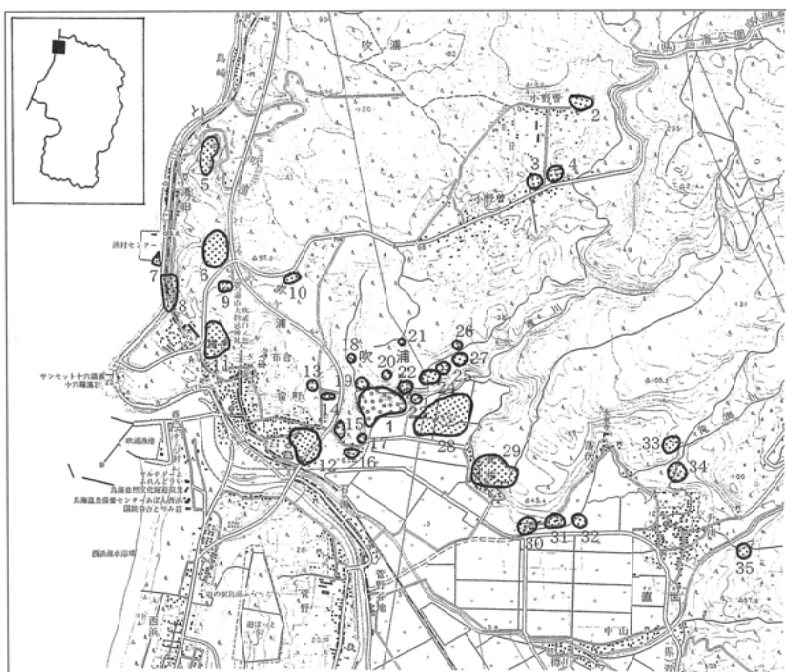
図版 1 第 I 調査区の調査状況 (1)	
図版 2 第 I 調査区の調査状況 (2)	
図版 3 第 II 調査区の調査状況 (1)	
図版 4 第 II 調査区の調査状況 (2)	
図版 5 第 I 調査区の遺構出土状況	
図版 6 第 II 調査区の遺構出土状況	
図版 7 ST2 出土の主要土器	
図版 8 第 I 調査区出土の主要土器	
図版 9 第 I 調査区の出土土器	
図版 10 第 I 調査区の出土土器と土製品	
図版 11 第 II 調査区出土の主要土器	
図版 12 第 II 調査区の出土土器と土製品	
図版 13 第 I 調査区の出土石器	
図版 14 第 II 調査区の出土石器	
図版 15 第 I・II 調査区の出土石器	

第I章 遺跡の環境と調査

1 遺跡の立地

日本海より聳え立つ大型成層火山である鳥海山(2,236m)を仰ぐ遊佐町は総面積208.41km²を測り、庄内地方の北端に位置する。鳥海の南西山麓一帯や西方日本海に流下する中小河川沿いの平野部自然堤防上には、207ヵ所(平成17年11月現在)の遺跡が確認され、合併以前の北庄内の旧自治体では最も遺跡の登録数は多い。なかでも縄文時代の遺跡は114ヵ所を数え、55.1%を占める。次いで42.5%を占めるのが律令期の出羽国古代集落である。両時代をあわせると実に登録遺跡の9割以上となる。一方、現状では弥生～飛鳥時代にかけての遺跡の発見が極端に少ない傾向を示す。当町の人類の足跡は後期旧石器時代前半期に遡るが、縄文・平安両時代の遺跡の突出した発見数は、県下でも特異な傾向と言える。これは鳥海の自然環境は無論、吹浦の河口部の港湾機能と南北陸上交通の要衝の両面を持つことに加え、一ノ宮が鎮座し、古代～中世の出羽国政が関与した結果である。小山崎遺跡は庄内平野北端に位置し、縄文時代には日本海から入り込む潟湖の辺の環境が判明している。現在では河口部まで直線距離で1.6kmを測る。鳥海山の裾野が平野部と接し、崖線からの湧水源が周囲に点在し、南方遥かに月山を望む。行政地番は遊佐町吹浦字七曲、七曲堰ノ東、柴燈林他である。小山崎の名称は箕輪鮭人口孵化場の西に180m程の長さで伸びる標高6m前後の低平な舌状台地の俗称である。台地の周囲には低湿地帯が形成され、早期から晩期に至り、最深部は海拔以下となる層厚2.5m以上の動植物遺存体を含む包含層が、平均水温10℃の安定した地下水位の環境下にある。

周囲には、学史に記された縄文遺跡が散在する。正史『日本三代実録』に兵事の兆しとされた「飽海郡神宮寺西浜」での石鏃降雨事件は先史遺物の古記述であるが、大物忌神社に程近い現砂丘下の埋没遺跡の存在を示唆している。西方0.7kmの吹浦遺跡(前期末)は長谷部言人博士の試掘(1919)に始まり、柏倉亮吉らが「吹浦式土器」を提唱した標識遺跡である。第二期調査で173基のフラスコ状土坑を検出した。北方4.8kmには、国内の金属製品の初現を示す中国盛殷期の青銅刀子(蔵:東博)が出土した三崎山A遺跡(後期)が異彩を放ち、昭和27年の杉沢A遺跡出土の晩期後葉の遮光器土偶(蔵:奈良博)は優品とされる。また南東4.8kmには、庄内地方の縄文後期土器編年を構築した神矢田遺跡(佐藤禎宏他、1972)が位置するが、小山崎遺跡周辺は、縄文期、旧潟湖の外洋との接点付近で形成される縄文集落群と認識される。



周辺の縄文遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	小山崎	19	七曲道上
2	小野曾C	20	柴燈林2
3	小野曾A	21	柴燈林3
4	小野曾B	22	丸池
5	湯之田山	23	荒川
6	小屋林道西	24	柴燈林
7	釜磯	25	牛渡1
8	南光防坂	26	柴燈林4
9	小屋林道東	27	牛渡2
10	ムジナ堂	28	舟森
11	小長坂	29	箕輪
12	吹浦	30	下山
13	大黒坂	31	笹淵
14	物見峠B	32	目倉神
15	物見峠A	33	小倉向
16	小谷地	34	山居
17	物見峠C	35	川東
18	柴燈林5		

図1 小山崎遺跡周辺の地形と遺跡(1/50,000)

2 調査の経過

丸池より遺物が採集されることで明治期より知られた小山崎遺跡は、西方の吹浦遺跡の発掘調査報告書（1955）で存在が紹介されたが、貴重な低湿地遺跡として位置づけられるのは、県営圃場整備事業を契機とする第1次調査（渋谷1995）が発端である。縄文時代早期末から晩期の遺物が層位的に出土し、水辺の構築物も確認された。特に高い地下水位の冷涼かつ安定した環境下に保たれた泥炭質の包含層に多量の動植物遺存体が伴う事実は遺跡の評価を劇的に変化させた。縄文時代の長期の海面変動、植生等の環境や食料、生業を立体的に語る資料を提供可能な遺跡として重要性が認知された。

遺跡の主要な低湿地部分（11,307m²）は遺跡の保存・活用事業用地として2004年に遊佐町により公有地化された。調査は2002年の第7次調査まで、県教委により継続され、主に低湿地部に調査区を設定したが、舌状台地上でも若干の調査が実施された。膨大な有機遺物を含む生活残滓を低湿地に残した縄文人の居住域を探索する目的であったが、住居跡を検出するには至らなかった。一方、地表面下2.5m前後、海拔0m以下に至る動植物遺存体を含む包含層の化学分析による海進・海退等の変遷、植生分析の結果は、新潟県以北の日本海側では極めて重要なデータを提供した。また、第2次調査A区の建物遺構、4次Ⅱ区で全貌が判明した湿地北西部の柱根と配石道付帯の水辺の遺構や、6次T区で検出された焼土層を伴う小貝塚など生業活動を語る重要な遺構が検出されている。各調査次には、舟の櫂、丸木弓・漆器、骨角器等、また儀礼的要素を持つイノシシ形漆塗木製品等の優品が出土した。動植物遺存体では、第6次調査で人骨（頭骨・下顎骨）も検出されている。

県教委の調査成果を受けて、03年から町教委では第8・9次調査、翌04年に第10・11次調査を緊急雇用対策事業として実施した。低地部の主体を示す縄文後期集落構成の解明という目標を持って臨んでいる。計4次の調査では、遺跡北方台地上を中心に分布調査（一部確認調査）を行い、縄文中期～平安期の新規7遺跡を登録した（2005）。標高18～30mの柴燈林遺跡（B地区）は、中期中葉のやや大規模な集落の存在が確認され、大木8a式期の土器に伴出し、新潟方面より搬入された火焰型土器が出土している。一連の調査で、広域的な遺跡の分布を把握する成果があった。平成17年の第12次調査から国庫補助を受け、居住域の確定に向け5ヵ年計画で取組みを開始した。調査地は再び低湿地付近に視点を戻すことになる。12～13次調査では安山岩の巨岩が露出し、殆ど包含層の確認できない舌状丘陵上の堆積状況の悪さに苦しみ、明確な住居にからむ遺構を捉えることはできなかったが、出土した遺物により、確実に低湿地北方台地上で生活が営まれた事実を掴んでいる（佐藤 大川2005）。12次調査では、低湿地部に南面して落込む急斜面直下の湿地部（Ⅱh区）より、縄文後期前葉の有機物を伴出する生活残滓の投棄場が確認され、骨角器2点を含む極めて状態のよい多様な動植物遺存体が検出された。同定結果から、カスザメ類、サケ・マス類、マダイ、ヘビ類、アビ類、アホウドリ類等が認められ、タイ類は貝塚類似の大型個体が含まれ、魚類は焼骨が多く見られた。縄文人の食料資源としての利用を直接的に考察する上で、ツキノワグマの臼歯と末節骨の廃棄場の性格の地点からの出土状況等の興味深い生業に関わるデータを得ている（金井2005）。銚先形の骨角器はかつて検出されている釣り針と共に、多様な狩猟道具の存在を示した。12次調査での投棄場の地点の確認は、湿地部から見上げる台地上に縄文人の主体的生活域が展開することを強く示唆していた。小面積の調査ながら、出土した後期前葉の土器群は宮戸1b式や堀ノ内1式併行期の特徴を持ち、比較資料の少なかった地域にとって基準となりうる資料を得ている。加えて、主体的な居住地点の探索については、翌年から劇的な展開を見せる上での萌芽が見られた。台地部での居住域探索の必要性が増す中で、小山崎丘陵の付け根付近は、高倉林道に分断されているが、地形的には林道北側まで地続きの状態が現地では実感できた。舌状台地の調査を進める上では、林道北側に沿う形で観察できる山林内平坦部にまで視野を広げる必要があることが、おぼろげながらも、初めて念頭に上がってきた。

翌2006年の13次調査では、集落根拠地を推定する上で興味深い事実が浮かんた。湿地に伸びる舌状台地の試掘により出土した資料は後期末～晩期の資料が圧倒的に多く、中期～後期の土地利用の状況は希薄であった。近世における新田開発時の土取による影響も皆無とは言えないが、出土遺物の時期的な偏りの点については後世の人為的影響を被ることは少ないと考えられ、舌状丘陵の利用は後期終末～晩期とみなすのが妥当といえる結果であった。必然的に、先述の12次検出の台地直下の投棄場を利用した後期前葉の生活根拠地が問題提起された。遺跡内には高倉林道が東西に横切り、道を境に北側は南向きの広い山麓傾斜面となる。過去の分布・試掘調査では傾斜面を視野に入れず、中・高位置に2面存在する平坦面を調査して後期集落を追及できずにいた。そこで林道に沿い若干の試掘を実施した結果、林道南方とは別次元の良好な堆積環境が判明し、遺物も後期の資料が目立ったことから、調査後半は林道北部緩斜面地帯での詳細かつ広範囲の試掘調査に加え、2ヵ所の確認調査区が発掘された。結果、想像以上の密度で、後期を主体とする遺構が展開していることが判明した。また、遺跡の下限を早期後葉まで遡らせる野鳥式併行期と目される示す資料の検出もあった（2006佐藤・大川）。

13次調査は集落根拠地探索の大きな転換点になったが、遺構保存を優先して、大部分はプラン確認に留める調査であった為、堆積層序等、解明に必要な課題の解決は翌年の14次調査にて実施されることになった。

2007年に実施された14次調査は、山麓の傾斜面に直交する4本のトレンチ調査と2ヵ所の確認調査区で実施した。調査区の包含層の堆積環境は良好で、地点によっては分厚く崩落土が覆い、先年の1m²の坪堀による試掘時には無遺物の地山層と誤認していた状況が判明している。崩落土を取り除くとその直下より包含層が連続するという層序が判明し、13次調査では遺構、遺物の希薄な地点と認定された場所の再調査の実施も行い認識を改めている。層厚は厚く規模の大きい崩落安山岩の除去等、作業は難航したが、成果は大きく地表面下約1.5mまで遺構、遺物の存在が確認できた。待望の住居跡に関係する遺構も明瞭な形で検出できた。トレンチ断面では、比高差約1.2mの堅穴住居の構築に係る壁面の削り落としと水平な床面造成の実態が判明し、縄文人が斜面地の居住域において切土等の土木工事を実施し、生活面を築いていたことが確かとなった。また、第Ⅱ調査区では複式炉を備える中期後葉の直径5m程の住居跡と後期の遺構の切り合い等が認められた。この時点で、低湿地から100mに満たない南向きの山麓傾斜面に確実に中期末葉の住居跡が複数軒、構築されていたことが判明した。後続する後期については、明瞭な住居跡としてのまとまりの把握は困難であったが、第Ⅰ調査区では少なくとも2軒以上の住居跡の存在が窺える遺構が検出された。またトレンチ1からは後期後葉（新地式）の埋設された深鉢が確認された。トレンチに限定されたことで詳細は不明であったが、住居跡の中に埋設されていた可能性を考察する。14次調査によって、居住域が、低地に程近い南向き傾斜面地であることが確実となった。同時に、次年度の課題として、住居の時期的なまとまりの規模と斜面地の中での立地の変遷について取り組む必要が浮上することとなった。

12～14次調査では、林の中の、崩落土が覆い、安山岩の大岩が転がる斜面地の集落発掘の調査の進め方を模索したが、年次を重ねる毎に、集落、住居跡に関する手掛かりが集積され、居住域の様相解明が着実に前進した。保存目的の性格上、遺構の掘削は最小限に抑えながらの調査を実施したが、比較的調査面積の少ない状況もあり、遺構の様相が捉えにくいという一面もあった、2008年の15次調査は上記の課題も考慮しながら、居住域における確実な遺構の存在を少しでも増加させることを念頭に臨むこととなった。

第Ⅱ章 本次の調査

1 調査の目標

第14次調査の結果は、丸池を見下ろす南向き斜面部に6軒程度の住居跡が構築されていたことが推定されるものであった。明瞭な複式炉が構築された住居を確認することもできたが、同時期の住居が一定範囲にどの程度の密度で分布していたのかという疑問に加え、出土土器の持つ時間幅（中期終末～後期）と同様に、住居跡についても次期別の立地変遷があるのかという課題が浮上している。このことから、今次の調査では、昨年度に中期末の住居跡と、それを切って後続する後期の遺構が確認された調査区（14Ⅱ）の西側に調査対象地を選定し、同時期の住居跡のまとめ、集落規模を把握する目的を持って臨むことになった。過去の試掘坑、トレンチの観察により、堆積層が厚く、対象面積も広いことから、調査は来年度と二カ年に分けて実施することとした。昨年度の結果から、15次調査設定区域内には中期後半～後期の遺構が確認される可能性が高いことが予測されており、また、次年度に予定しているやや西方の区域には後期の集落立地が現段階で予想され、調査によって証明することを目標としている。

2 調査の内容

調査地は鳥海国定公園第3種特別区域に属している。自然公園法による許可を得、調査に先行して一帯の継続的な地形図の作成（50cmコンター）を行い、調査用の測量基準点を設置している。今次の測量で、山麓傾斜面地の集落立地地点のおおよそ全域の測量が終了している。すべて民有林内となった。支障となる調査区内の杉の木は伐採した。

実際の調査では先に第Ⅰ調査区の掘下げを開始し、進展に伴って第Ⅱ調査区の掘下げを開始した。第Ⅰ調査区では、14次調査のトレンチ断面で観察できた竪穴住居の掘り込みを示す地点を中心に東西に調査区を拡大する方法を採用した。予想は的中し、斜面地に造成された竪穴住居（ST2）を正確に調査区内で完結する形で捉えることができた。所属時期は中期末葉の大木10式土器期であった。昨年度にトレンチ断面で確認された地山を削り落とした遺構は、予測どおり竪穴住居跡の北壁であったことを立証することができた。この住居は複数回の建替が実施されていたことも判明した。一軒については床面に構築された柱穴、複式炉の構造も、必要最小限ながら掘下げを実施したので、将来の復元等が可能な詳細な構造のデータを得ることができた意義は大きい。

一方、第Ⅰ調査区の南斜面下に設置された第Ⅱ調査区では、Ⅰ区ほど明瞭ではなかったが、確実な住居の存在を示す複式炉や周溝、柱穴、竪穴の壁を確認することができた（ST3）。Ⅰ区の住居同様に複数回の拡張が見られたが、地山の粘土層が確認できないほど遺構の切りあいが激しく、また、後に崩落してきた安山岩の影響で、調査区全体を精査することはできなかった。確認された住居はⅠ区同様に中期末葉の竪穴住居であるが、複式炉の長軸線が同一方向に振れている等、共通点が多く、同時期に存在していた可能性が指摘できる。また、調査区内からは晩期の完形土器も確認されている。

2つの調査区で行った確認調査の他に、小規模であるが試掘坑による遺跡の北限ラインを確定するための1㎡の試掘を7カ所で行っている。ほぼ無遺物で、従来の範囲を修正するものではなかったが、内1ヶ所で遺物の出土が確認され、また、竪穴状の遺構覆土も確認できたことから、一部、遺跡範囲が斜面北方に拡大する傾向がうかがえた。

今回の調査による出土遺物はコンテナ約40箱であり、文化財保護法により文化財認定を受けている。



図2 遺跡の地形と調査区

第Ⅲ章 調査の結果

1 第Ⅰ調査区の調査

(1) 調査区的位置 (図 2・3)

14次調査Ⅱ区と4Tの間、4Tを挟む形で東西8×南北9m、面積72m²で設定した。北西から南東へ傾斜し、西壁の地表面の比高差は2.7mに達する。東西は比高差1.18mで東にやや下がる地形を呈する。14次の竪穴住居ST1の西側に位置する。平均斜度16度を測る。

(2) 層位 (図 4)

調査区の西壁面と旧4Tで基本層序が観察できる。北壁3層には斜面に堆積した崩落土が確認される。微量の炭化物を含むが遺物はない。崩落土の下層は暗褐色の遺物包含層となり、住居跡ST2は4層の褐色粘土から掘り込まれる。ST2住居内覆土と住居を切る性格不明遺構SXの遺構覆土は色調、粘性両面で差異が感じられる。4a層では床面直上層特有の斑状の色調を持つ粘質土となり、住居床面については地山層との明瞭な違いが認められ、貼床が確認された。

(3) 出土遺構 (図 6・7)

調査区の中央から竪穴住居ST2を検出している。ST2aを最新として、計5軒の住居が重複している。最新のST2aを中心に調査を実施している。ST2a平面形は、南辺部では遺構SXの影響もあり、周溝や地山の掘り込みが確認できなかったが、複式炉の位置から推測すれば、円形を呈する。長軸5.5m×短軸5.0mを測る。壁の立上がりは北側で顕著であり、最大1.2mの掘り込みによる比高差を持たせて水平な床面を造成している。住居北壁については、西～北西部で、地山の粘土層を掘り込む形で明瞭に壁面を検出できた。しかし北側～北東部で相当な比高差を持って削り込みを行っていることは確実であったが、明瞭な地山の壁面検出には至らなかった。これは先行するST2b・cの住居跡と重複することに起因している。このことにより、ST2aの平面プランについては住居北半を半周する最大幅30cmの周溝SD1によって確定している。なお、SD1はST2aより一段高いST2bの住居跡床面を削って掘り込まれている。

炉は複式炉で、住居南側中央部やや南寄りの位置から南東へ向かって複式炉EL1が構築される。EL1の規模は前庭部が僅かに失われている可能性があるが、現存で長軸2.0m×短軸1.2mである。複式炉の中軸線の方位は土器埋設部を先端として北から西に25度である。埋設土器EU1は平面と南側の断面観察で口径25cmの深鉢形土器が正立して埋設され、大木10式土器の特徴を備える。周囲の石、堆積土は被熱し赤化が見られる。土器埋設部周囲の構造石には一部、磨石等、川原石の使用が確認されるが、土器埋設部南側の石組部で使用された石材はすべて角礫である点が特徴的である。石種については、遺跡で数多く観察できる安山岩とはやや色調の点においても特徴が異なり、青みを帯びる。前庭部の袖部は不明瞭である。主柱穴はSP1・2・3・4・6・8・9・10の8基が床面上で検出された。半截、もしくは25%の掘下げを実施した柱穴はSP4・6の2ヶ所に限られ、他はプラン検出に留めたことで、同時期に使用された柱穴を確定するには至らないが、複式炉の長軸線から住居の中軸線を捉えた場合、SP1・4・8・10の4基がほぼ左右対称となる。床面ではより古い住居の存在を示す周溝SD4とSD3が一部ではあるが検出された。SD3はSD1の内側の輪郭に沿う形で検出されたことから、SD1はST2d住居の拡張に伴って新たに掘られた周溝の可能性も考察できる。ST2bとST2cの新旧は、平面における切り合いにより、ST2cが先行することが確認できた。以上のことから堅穴住居ST2はST2a期に構築された住居を最新に、計5軒の重複が認められる。

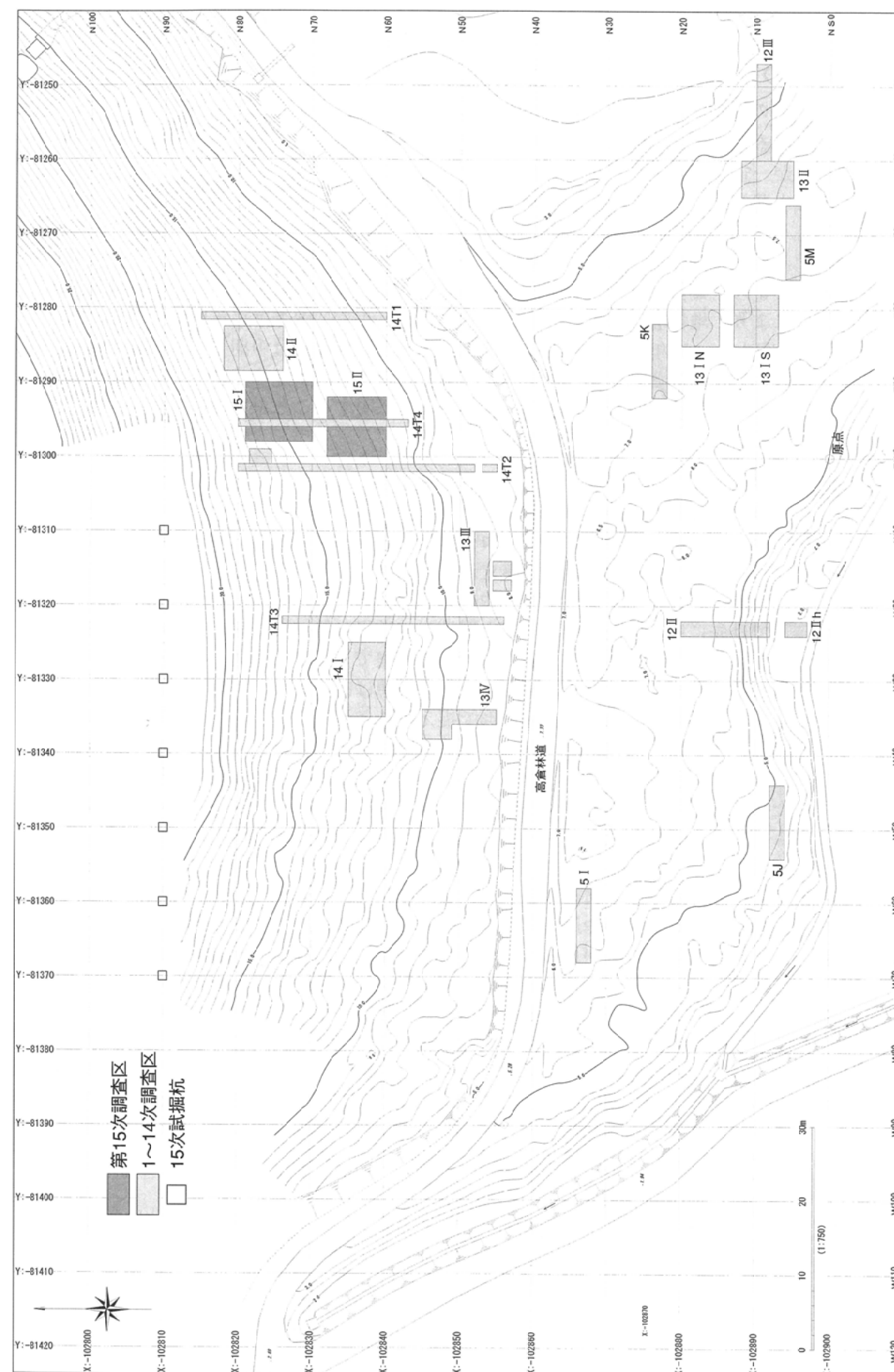


図3 調査区の配置図

（４）出土遺物

①土器と土製品（図9・11～15）

出土土器の所属時期は中期末葉の大木9・10式土器が中心となり、出土量も最も多く確認できる。ST2床面直上の覆土からの出土が顕著であり、複式炉EU1の埋設土器の現地での確認で、大木10式期の特徴が認められ得たことと符合する様相を示す。注口土器1は注ぎ口が急角度で上を向き、横位の楕円文の施文で大木10式土器中段階の特徴を示す。無文帯には彩色の痕跡がある。19・20は縄文条痕の中期末葉、21は棘状文様付される大木8b式土器が一点のみ検出された。縦方向に展開する楕円文や渦巻文様を特徴とする大木9式土器の一群は比較的破片資料に多く確認される（22～30）。波濤文や横方向に展開するアルファベット状区画文の大木10式期の施文の特徴を示す資料は接合資料にも多い（2～6）。2は胴下半部を欠くが、頸部から胴部上半に横位に区画文が配される壺である。8は垂下する沈線間が磨消され、地文は撚糸となる宮戸1b式併行期の特徴で後期前葉の深鉢形土器である。後期の土器は破片資料が多く確認できる（図15）。幅の狭い沈線間に縄文が認められる十腰内1式期併行期の資料（53～61）などの後期前葉が比較的多く、装飾突起や羽状縄文の後期中葉の資料（62～68）に加え、貼瘤のある後葉の資料（69・70）がやや含まれる。後期の土器はST2の時期とは合致しないため、直接的な関係はない。

②石器と石製品（図19・20・23）

比較的小形の石器が目立ち、石鏃は未成品も含まれる（1・2）。アスファルトの付着は石鏃の他、18の石匙にも確認できる。ほとんどが珪質頁岩製であるが、石鏃等の小形の製品には半透明状を呈するほど珪質化の進んだ頁岩を使用している。小形の磨製石斧28は蛇紋岩製である。石皿、磨石、石斧には鳥海山で産出される安山岩を多用する傾向がある。19はST2住居床面から検出された削器であるが、基部を削出した形状は特徴的である。土器資料と同じく、やや中期～後期の時間差が認められる。

2 第Ⅱ調査区の調査

（１）調査区の位置（図2・3）

第Ⅰ調査区の2m南側に設定された。一辺が8mの方形で、面積が64㎡の調査区である。西辺は1mの幅を残し14T4に接する。南東へ傾斜する地形となり西壁地表面での比高差は2.45mである。ほぼ中央を南北に14次4Tが貫いている。

（２）層位（図5）

層序は西壁で10層まで確認した。3層はⅠ区同様に無遺物の崩落土が存在する。3層は北壁とベルトu～vでは西に偏在して確認でき、調査区の西側に隔たって流下したことが推測できる。4層より暗褐色の遺物包含層となる。住居跡等の遺構の確認面は北壁と西壁層序では7・8層、東壁と南壁層序ではやや薄く5層である。北壁と西壁の4a層には大小の円礫を多数含む。

（３）出土遺構（図6・8）

調査区南部で住居跡ST3が検出された。北半のみ調査区内で捉えることができたが、遺存状態が悪く、土層観察用ベルトの未掘部分も含むため、複式炉、周溝と壁の一部を確認したにとどまる。住居の構造に関わる遺構の多くは東側で検出されている。住居跡ST3は中央部に炉跡EL2を備える。炉は複式炉であるが、埋設土器EU2より南の組石部が特に東側で検出できていない。これは14次調査の幅1mのトレンチ掘下時において、角礫を多用した構造石を遺構と判断できずに除去した可能性が高い。床面には南東に伸びる焼土層が明瞭に観察され、複式炉石組部～前庭部の範囲を推定することが可能である。炉の西半分は安山岩が被さり調査が及んでいないが、4T断面で石組部が確認できる。推定される炉の軸線は土器埋設部を先端として北で西に約20度程度となる。埋設された土器は雁又文が付された大木10式土器中段階の胴下半部を

切断した深鉢形土器である。胴部上半が内外面共に被熱による肌荒れが観察できることから、下半部は埋めた状態での使用が推察できる。炉の周囲の石と土壌は強い被熱により赤化している。周溝は最も外側にSD1、内側にSD2と3の計3条検出できた。各周溝は、大部分プラン確認に留意したが、平面の観察により、直径約20cm程度の小pitが連続する様子が確認された。要所で小規模な掘下げにより深度を確認している（SP1・4・5）。SD1の外側は小規模ながら対応する壁面の立上りが確認できる。SD1がST3の住居の最新の規模を示し、SD2・3はST2の住居拡張の過程を示すことが推察される。各周溝と複式炉との位置的に適した支柱穴は判然としないが、SP2・3・7・10が周溝上、あるいは周溝に近い位置に確認される。住居西側は床面での遺構は小規模な柱穴一ヶ所にすぎないが、地山の粘土層を掘下げた住居の壁面が観察できる。この地山を削り込んだ壁面の一部はベルトを挟んだ東側のSD1の外側で立上がる壁面に繋がり同一の住居の北壁を形成する可能性が高い。唯一確認された炉跡EL2とSD1が対応関係にある場合、ST3の規模は長軸約5m、短軸約4m程度が予測される。最も古い時期の住居の周溝のSD3の掘り込みを始めとして、SD2、SD1の順序で住居が拡張された結果、ST3は計3軒の堅穴住居の重複であることが判明した。

（４）出土遺物

①土器と土製品（図10・16～18）

出土土器は中期後葉～末葉の大木9・10式土器の資料（図16・17）と後期～晩期の資料（図18）に大別される。中期後葉～末葉の一群はST3で検出の複式炉を持つ住居跡と直接的に関連する。後・晩期の資料は対応する遺構が未確認である。80・81は晩期初頭の大洞B1式土器併行期のほぼ完全な小鉢である。なお、中期後葉以前の土器が若干出土した。83～85は中期末葉の表裏縄文、縄文条痕土器で素山上層式併行期、やや時期が下って中期初頭の資料として半截竹筥の押引による半隆起線文で並行、あるいは格子状沈線を描く北陸の新保式併行期の資料（86～90）が確認できる。中期中葉は、大木8a式の土器が僅か1点（91）だが出土した。

複式炉の埋設土器74は縄文部分と無文部分が入り組み構成される雁又文が大木10式土器中段階の特徴を示す。79の小形土器はST3床面の検出である。中期の土器は概ね第Ⅰ調査区と同様な傾向を示し、縦位に展開する楕円文や渦巻文の大木9式の資料（92～104）と、波濤文やアルファベット文様が横位に展開する大木10式の資料（105～117）の双方出土している。後続する後・晩期の資料は、120～130は縦方向へ走る集合沈線を用い、口縁部に無文帯、あるいは口唇部に沈線が見られ、胴部に刺突の施文が施される資料（126）等、宮戸1b式～堀ノ内1式併行期の資料である。幅の狭い沈線間に縄文が認められる十腰内1式期併行期の資料（132～142）も比較的多い。144～152は後期中葉～後葉にかけての資料である。152は微隆起線の結節点に貼り瘤が付される。77・153～156は晩期前葉大洞B1から中葉C1式にかけての土器である。118・119は円盤状土製品である。土製品での白眉は82の土偶である。頭部を欠くが、Y字状隆帯と上端乳房が一体化した大木9式期と推察される板状の中実土偶である。

②石器と石製品（図21～23）

石鏃、石錐等の小形の資料が目立つ。石鏃は古くは二等辺三角形の早期末に遡るもの（35～37）から五角形を呈する資料（49）まで早期末～晩期まで各種確認できる。石匙は縦（61）・横両形態（63）出土している。石核は小形（58・59）と中形（60）に石質の相違が見られる。半透明質の珪質頁岩を素材とする石核は相対的に小形である。特筆される石器は、打製では77の異形石器と、居住域では初の出土となる硬砂岩製の砥石（91・95・96）の存在がある。91はST3住居床面での出土である。85は1点のみ出土した切目石錘である。円盤状石製品は未研磨の未成品が目立つ。

第Ⅳ章 成果と課題

遊佐町が主体となった2003年第8次以後は、後期縄文人の集落探索を目的として広く周辺山間の分布を調査しており、新規の遺跡7カ所の発見があったが意図した所在地の確定は不首尾であった。国庫補助を受けた05年の第12次以降は、調査の原点に回帰するかのように小山崎丘陵と近隣で見直しの吟味を開始したのであったが、これは相次いで新たな事実を把握することとなった。まず丘陵上の土取りで削剥された下部に遺物や遺構が残存しており、縄文人の生活の展開が認定できた。さらに半島状の丘陵付け根部分を林道が東西に走行しているが、06年の第13次では林道北部の山裾でも土取り後の地層に縄文早・後・晩期などの遺物や遺構が発見された。そして山腹傾斜面の標高約25mの高さまで、東西約100m、南北約50mにおよび遺跡の範囲が拡張された。こうして昨年(2007)年第14次では傾斜に直交させたトレンチ4本と調査区2カ所の山地を精査しており、裾野を鉢巻状にめぐる土取りの上限ラインが判明し、その北部の高所には身の丈を超えるほどの深さまで遺物包含層や遺構の存在が確かめられた。各調査区からも地床炉・柱穴・土坑のほか複式炉をもつ住居跡などが検出されて、山腹斜面における縄文人の居住の実態が鮮明になってきたのであった。

本次の調査は傾斜面での住居跡と集落の時期と構造の解明を目標としている。昨年の第4トレンチを南北軸として、平均傾斜角が16°の斜面上下に第Ⅰ区(8×9m)と第Ⅱ区(8×8m)を設定した。両調査区とも自然状態の地層が堆積しており、土取りなど後世の人力による破壊活動はなく、無傷の一次的な状態での調査のはずであった。ところが大小の岩石・礫・土砂が包含層内や覆土中あるいは遺構を破損する状況で流入しており調査を難航させた。これは地滑りによる流動であろうが、大雨や地震のほか鳥海山の火山活動による鳴動を起因にすることが多いかもしれない。

出土遺物は生活に直結する土製品や石製品であるが、土器は縄文早期末葉～晩期中葉の時期があり圧倒的に多いのは中期後葉であった。ついで後・晩期、微量の早～中期中葉となり、このような存在は各時期の活動の痕跡といえようが、今回の調査では中期後葉以外に具体的な遺構を検出していない。中期末葉の太田10式土器には深鉢・鉢・台付鉢・小形鉢・粗製深鉢・壺・注口土器などの器形があり、同式を三分割する編年の中段階にあたるまとまった標識的な資料として貴重である。

竪穴住居跡がⅠ区中央部のST2、Ⅱ区南端部のST3と2ヵ所出土している。どちらにも重複した構築の形跡があり、最新の住居跡は複式炉を伴った大木10式土器の時期であった。ST3は住居の北半部で全形は不鮮明であるが拡張した周溝が認められた。1軒のほぼ全容を完掘したのはST2aで、昨年の第4トレンチg区北で一部を確認していたものである。今回の広げた精査で床面には拡張前の周溝が2条、北東部に切り合った覆土の竪穴が2ヵ所と合計5回の構築が重複していたが、全形を確認できたのは最終的な築造のST2aである。平面はほぼ円形で5.5×5.0m。北縁部は垂直な竪掘りが半円形に施されて周壁をなし、内側に周溝がめぐり水平な床面が築かれており、南縁部は壁がなく開けた斜面特有の造りである。内部の中央南に複式炉EL2が設置されており、北西に埋設土器を置き石組部が南東に開き、主軸方位はN-25°-Wと西に振れているが傾斜方向に一致している。ST2a内は自然に堆積した地層の覆土であったが、この住居に切られたST2bとcの覆土は比高1mほどの断面に層位的な堆積の形跡がなく、小石混じり粘質土の部厚い地層であり、滑り落ちる土砂が一気に埋め尽くした状況と観察された。なお、ST2の重複した構築住居の細分時期は特定できなかったが、中期末葉の大木10式期にごく近接する時期であろう。

本次の調査では後期直前の一括される土器群が編年上で注目できよう。さらに同時期の住居跡2カ所が斜面の上下で検出されて、あたかも段々畑的な段々集落の景観が推察された。これらの西側を予定地とする第16次調査は、これまでの予備的な分布調査からは後期集落の現出が期待される。

表1 出土遺物集計表(1)

調査区	出土小区 遺構・トレンチ	層位	土器(部位別)			土製品 甕・土偶	備考 復元可 炭	小計	母岩 原石	石核	楔形 石器	打製石器				円礫 入	礫石器				円盤状石製品		磨製石器・石器		小計	総合計
			口縁	胴	底							剥片 石	異形 石	剥片	加工 剥片		石皿	磨石	凹石	剥片 欠損	石錘	砥石	製品	未製品		
Ⅰ区	aa	1・2	3	4	1			8																0	8	
		3・4	1	17				18																1	19	
	ba	1・2	2	4	1			7																0	7	
		3・4	6	44				50					1				1				1			3	53	
	ca	1・2	1	1				2																0	2	
		3・4	14	131	2		1	148				3	1		1						1			6	154	
	住居内覆土	F1		3				3																0	3	
	da	1・2	1	1				2																0	2	
		3・4	3	32				35			1	1					1							3	38	
	ab	1・2	2	6				8																2	10	
		3・4	2	51	4			57				1							1					2	59	
	bb	1・2		19	1			20																0	20	
		3・4	1	97	4			102	1			3												4	106	
	住居内覆土	5・6						0					1			1								2	2	
		F1・2	5	77	3			85				2												2	87	
		F3・4		1				1																0	1	
		1・2	5	49				54				1												1	55	
		3・4	32	300	10		○	1	343	1		1		10			1	2	1					16	359	
	cb	5・6	2	22				24				1												1	25	
		7・8	5	56				61				4												4	65	
		F1・2	16	123	5		○	2	146			2												2	148	
		F3・4		3	1			4												1	1			0	4	
	db	1・2	12	38	2			52							1	1					1	1			4	56
		3・4	9	96	3			2	110			2			1	1				1			1		2	8
		5・6	4	67	1			1	73				3	1											4	77
	住居内覆土	F1・2	5	38			○	2	45			5							1					6	51	
	ac	3・4	8	99	2	1	○	110			1	6		1				2				1		11	121	
	住居内覆土	F1・2	7	68			1	76				4						2						6	82	
	bc	1・2	8	75	3			86			2	2													5	91
		3・4	8	62	3			73			1	1						1						3	76	
		F1・2	17	105	1		○	123				16	1	2										19	142	
		F3・4	2	14	1		○	17							1									1	18	
	ベルト除去	未分層	2	17				19					1											1	20	
	cc	1・2	2	29	2			33	1				1	1										3	36	
		3・4	37	348	16		○	1	402				4		1		2							7	409	
		5・6	4	56				60			2	2												4	64	
		F1・2	56	413	14		○	2	485	4			11	4				1	1			1		22	507	
	ベルト除去	未分層	2	36	4			42																0	42	
	dc	1・2	2	16	1			19					3											3	22	
		3・4	11	176	6			1	194			2	14	3	1									1	21	
5・6		7	37	4		○	48	1									1						4	52		
7・8		13	123	2			138					3											3	141		
住居内覆土	F1・2	4	55	5		○	64			2	11	2				1						1	17	81		
	F3・4	5	8	2			15				1												1	16		
	ベルト除去	未分層		6	1			7															0	7		
ad	3・4	9	67	2			78		1		4	2				1							8	86		
	F1・2	2	13				15					1											1	16		
bd	1・2	1	9				10																0	10		
	3・4	7	42	2		○	51	1				2				1		1					6	57		
	5・6	1					1			1												1	2			
	F1・2	25	220	4	1	○	250					7					2				1		10	260		
cd	F3・4		5				5					2											2	7		
	1・2	2	18	1			21																0	21		
住居内覆土	3・4	26	305	23		○	354	1	1			3	1		3	2		2				6	19	373		
	F1・2	22	269	7		○	298				4	9	1			2		2					18	316		
ST2・3切合部	4・F1		2				2																0	2		
ベルト除去	未分層		23				1	24					1										1	25		
dd	1・2	4	20				24		1			2				1							4	28		
	3・4	9	72	3		○	84				2	3			1		2				3		11	95		
	5・6		5				5				1		1			1							3	8		
住居内覆土	F1・2		5				5																0	5		
ae	3・4	2	77	3			82					2				2							4	86		
be	3・4	5	11	1			17					2					2						4	21		
ce	1・2		2				2					1											1	3		
	3・4		14				14								1								1	15		
	5・6	2	1			○	3																0	3		
de	1・2		2				2			1		1											2	4		
	3・4		11				11								1						1		2	13		
ベルト	—	2	8				10					2											2	12		
東壁SBT	—	2	10				12				1												1	13		
ST1	F1・2	2	10				12																0	12		
ST1-4T	F1・2		1				1																0	1		
ST1-SET1	F1	3	25	1			29						1					1					2	31		
ST1-SD1	F1	2	16	1			19				2												2	21		
ST2	—		2				2																0	2		
ST2-4T	—		3				3																0	3		

調査区	出土小区		層位	土器(部位別)			土製品		備考		小計	母岩 (原石)		石核	楔形 石器	打製石器			円礫 磨入	礫石器			円盤状石製品			磨製石器・儀器			小計	総合計		
	構槽・トレンチ	層位		口縁	胴	底	円盤	土偶	復元可	炭		剥片 材石器	異形 石器			剥片 加工	石皿	磨石		凹石	剥片 (次掘)	石錘	砥石	製品	未製品	石斧	小型 石斧	石棒				
Ⅱ区	ST2-SB-4T-EL1	—									0							1										1	1			
	ST2-SK1	F1・2	72	477	15			○	5	569						1	41	2	2			2				7		55	624			
	ST2-EL1	—		1	9	2		○		12																		0	12			
	ST2-EU1	—		1	7			○		8																		0	8			
	ST2-EL1・EU1	—		1	11					12												1						1	13			
	SD1	—		1	3					4																		0	4			
	4T	床直		1						1						1												1	2			
	4T-ST1	床直		1	1					2																			0	2		
		床直・F2		2	1					3																			0	3		
		床直・F3		1						1																			0	1		
	ST2	F1								0																			1			
		炉内								0								1											1	1		
	小計			530	4803	172	2	0	0	20	5527	10	3	2	31	0	197	21	13	7	20	5	25	0	0	1	25	2	1	4	367	5894
		aa	1・2		3						3																			0	3	
			3・4	4	29			1	○		34				1		6	6	1	1	1								16	50		
			5・6	35	322	12			○		369			2		17	3	1	1	3									27	396		
		ba	3・4	4	89	5					98					4	5	2	4											15	113	
			5・6	15	171	7			○		193					6	6	1	2		2								17	210		
			7・8		2						2																			0	2	
		ca	3・4		1						1						1													2	3	
			5・6	1	10	1					12				1															1	13	
			1・2	1	12						13																			0	13	
		da	3・4	3	40						43						5				1	1								7	50	
			5・6		11	1					12				1	1														2	14	
			1・2	1	6						7						1													1	8	
		ab	3・4	18	168	12																										

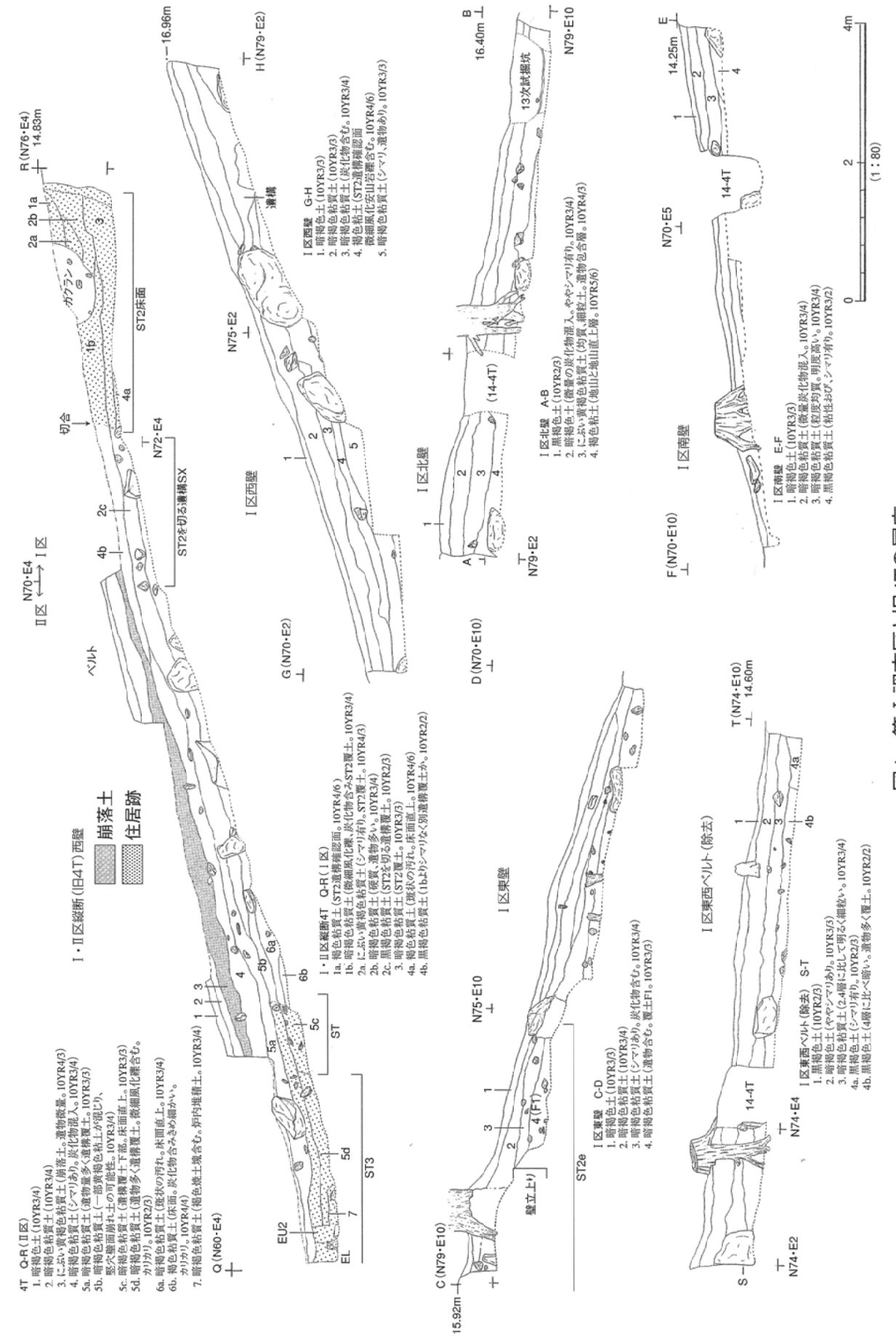
– 12 –

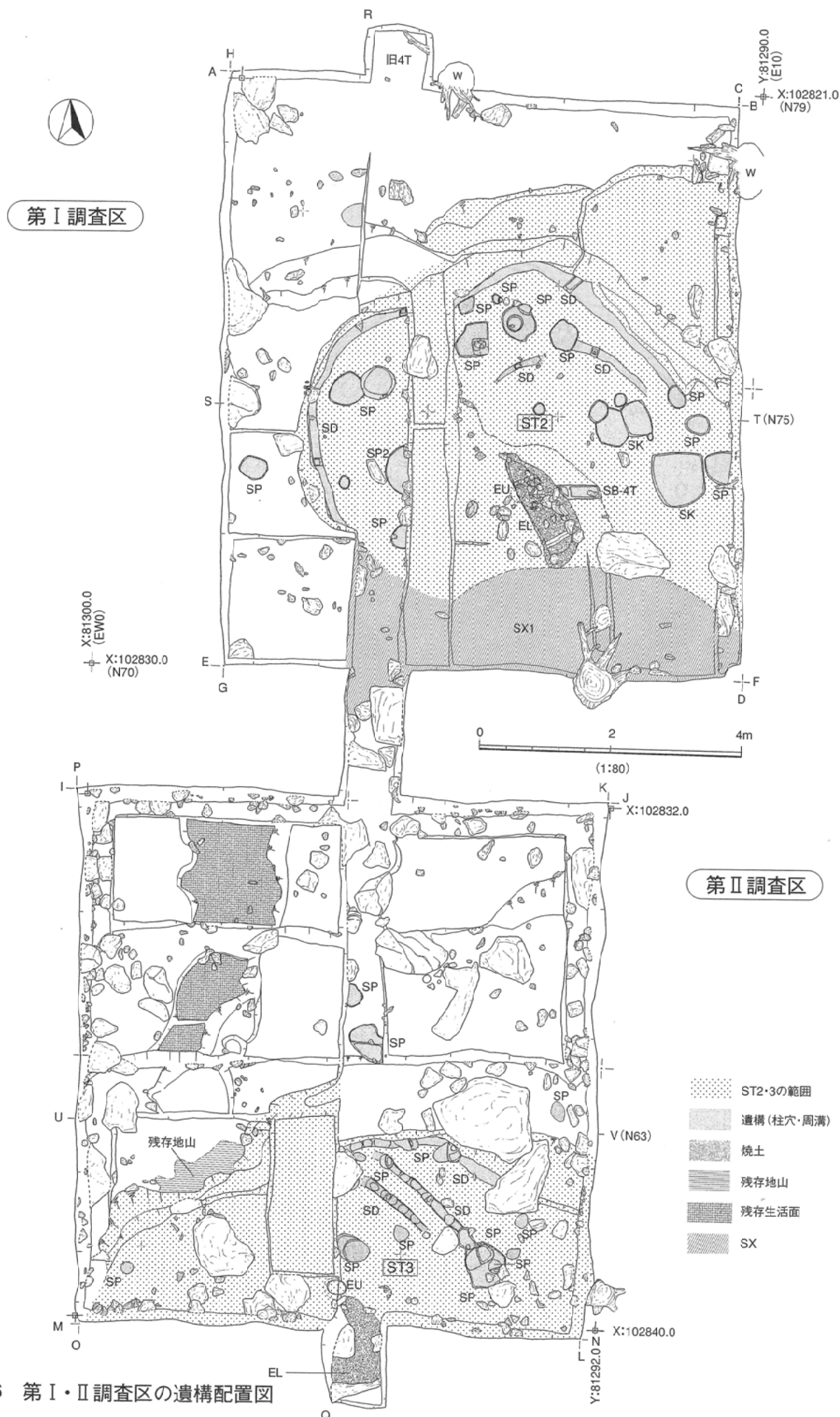
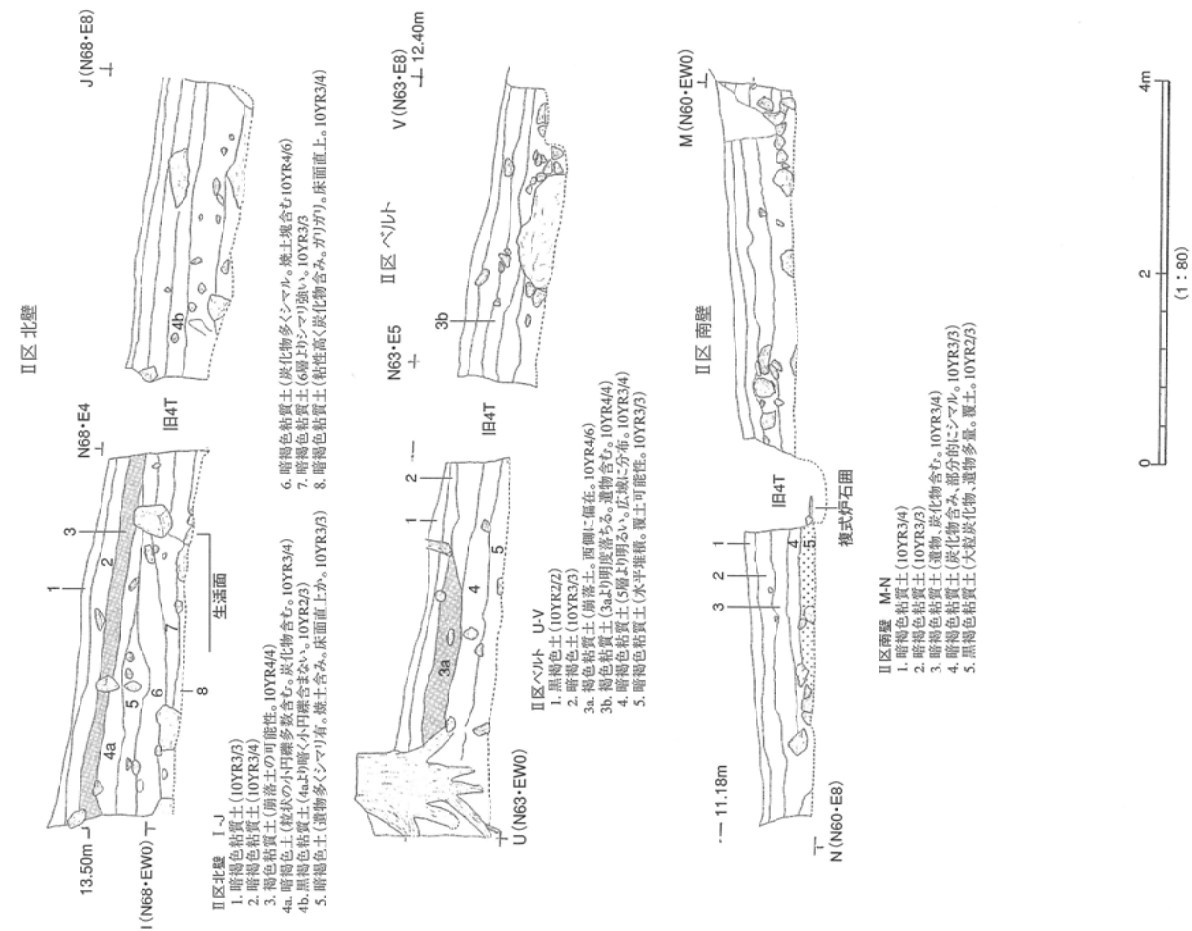
挿図 番号	番 号	機 種	調 査 区	出 土 区	層 位	計測値[mm.g.(現存値)]				RQ番号	石 材	備 考
						器長	器幅	器厚	重量			
19	1	石鏃	I	dc	4	36.5	18.1	7.2	4.0	58	珪質頁岩	尖基
	2	石鏃	I	cd	F2	45.0	(18.5)	11.3	(7.5)	97	半透明頁岩	尖基(未成品)
	3	石鏃	I	bc	4	27.1	19.6	6.9	3.9	63	珪質頁岩	凹基無茎
	4	石鏃	I	dc	F1	20.0	12.7	4.6	0.9	91	珪質頁岩	凸基有茎(未成)
	5	石鏃	I	cd	F2	15.0	16.2	4.6	1.5	108	珪質頁岩	凹基無茎
	6	石鏃	I	ST2	F3	31.1	22.8	4.8	2.9	74	珪質頁岩	凹基無茎
	7	石鏃	I	cc	F1	27.9	12.4	4.3	1.2	112	珪質頁岩	平基有茎アスファルト痕
	8	石鏃	I	ad	4	27.7	12.2	4.5	1.1	65	半透明頁岩	凸基有茎
	9	石鏃	I	ad	4	(19.1)	16.7	2.6	(0.9)	95	珪質頁岩	凹基無茎
	10	石鏃	I	ST1	F1	20.1	12.0	3.6	0.6	—	半透明頁岩	平基有茎
	11	石鏃	I	ad	3	(30.9)	14.5	4.1	(1.7)	47	珪質頁岩	凸基有茎
	12	石鏃	I	dc	3	29.2	13.4	4.6	2.0	75	珪質頁岩	凸基有茎
	13	石鏃	I	cd	F1	24.9	10.4	3.2	0.8	66	珪質頁岩	凸基有茎アスファルト痕
	14	石鏃	I	ad	4	(32.3)	13.7	4.9	(2.4)	57	珪質頁岩	凸基有茎アスファルト痕
	15	石錐	I	dc	F1	(20.9)	10.5	7.1	(1.3)	94	珪質頁岩	端部折損
	16	石核	I	cb	4	45.7	53.5	19.9	53.1	72	珪質頁岩	不定形剥片剥離
	17	石匙	I	ab	2	35.1	62.5	9.4	16.0	4	珪質頁岩	アスファルト痕
	18	石匙	I	ac	3	43.8	63.4	9.4	19.0	23	珪質頁岩	横型
	19	搔器	I	ac	F3	45.1	28.9	8.2	10.7	116	珪質頁岩	基部整形
	20	石匙	I	cd	F2	40.8	28.3	6.0	9.4	—	半透明頁岩	縦型未成品
	21	石匙	I	ST2	F2	47.0	35.4	8.3	10.5	—	珪質頁岩	縦型未成品
	22	篋状石器	I	de	2	(30.4)	31.0	12.8	(11.0)	—	珪質頁岩	早期末
	23	搔器	I	cc	5	27.3	23.4	6.4	5.0	—	珪質頁岩	弧状刃部
	24	搔器	I	dd	3	33.4	36.9	12.9	15.6	35	珪質頁岩	弧状刃部
	25	削器	I	4T	壁	49.5	20.3	6.4	6.3	77	珪質頁岩	縦長剥片素材
	26	削器	I	dd	4	58.6	28.4	8.3	12.1	71	珪質頁岩	縦長剥片素材
	27	削器	I	db	4	(50.1)	27.7	12.2	(17.7)	—	珪質頁岩	縦長剥片素材
20	28	石斧	I	bd	4	36.0	17.0	6.9	7.6	76	蛇紋岩	小形
	29	石斧	I	dc	F1	(84.5)	(45.5)	23.2	(169.9)	93	緑色砂岩	定角式
	30	石斧	I	cd	F1	(45.0)	60.4	21.4	(66.7)	98	半深成岩	定角式
	31	石斧	I	ST2	F1	88.0	45.4	25.3	146.8	105	安山岩	定角式
	32	石斧	I	dc	F2	(105.5)	53.8	28.7	(252.9)	102	安山岩	定角式
	33	石斧	I	de	3	(61.3)	46.9	19.8	(97.2)	46	硬質砂岩	定角式
	34	円盤状石製品	I	db	2	57.6	53.2	9.8	54.9	8	安山岩	周辺部整形
	21	35	石鏃	II	da	5	(19.4)	10.3	3.0	(0.8)	—	珪質頁岩
36		石鏃	II	bd	4	20.7	13.1	25.0	0.6	176	珪質頁岩	平基無茎
37		石鏃	II	ad	5	(19.5)	12.7	2.1	(0.7)	55	珪質頁岩	平基無茎
38		石鏃	II	cd	3	30.3	21.5	6.8	3.6	—	珪質頁岩	円基
39		石鏃	II	ab	5	23.8	13.5	6.5	2.2	138	半透明頁岩	未成(失敗)品
40		石鏃	II	dc	4	49.1	19.3					

表2 掲載石器属性表(2)

挿図 番号	番号	機種	調査区	出土区	層位	計測値[mm,g,(現存値)]				RQ番号	石材	備考
						器長	器幅	器厚	重量			
21	51	石鏃	II	bc	4	44.0	17.6	4.8	2.4	180	珪質頁岩	平基有茎
	52	石鏃	II	bd	4	24.8	11.4	3.6	1.0	177	珪質頁岩	尖基
	53	石鏃	II	dd	5	(44.1)	13.7	8.1	(4.8)	189	珪質頁岩	凸基有茎
	54	石鏃	II	cc	5	51.5	9.9	8.2	4.1	148	半透明頁岩	凸基有茎
	55	石鏃	II	bb	5	33.5	14.7	4.5	2.9	157	半透明頁岩	未成(失敗)品
	56	石鏃	II	bc	4	35.9	11.8	6.4	2.8	181	珪質頁岩	—
	57	石鏃	II	ab	4	(22.3)	9.4	4.4	(1.0)	178	半透明頁岩	端部折損
	58	石核	II	bd	5	33.7	28.7	18.6	18.5	—	半透明頁岩	小形(表皮残存)
	59	石核	II	cc	F2	40.1	25.6	18.5	20.9	—	半透明頁岩	小形(表皮残存)
	60	石核	II	ad	4	57.3	55.8	36.6	127.4	175	珪質頁岩	不定形剥片剥離
	61	石匙	II	ab	5	67.6	19.6	6.5	8.1	103	珪質頁岩	縦型
	62	石匙	II	db	5	(44.1)	(32.4)	7.9	(9.2)	110	珪質頁岩	縦型(折損)
	63	石匙	II	ad	5	34.1	68.4	7.7	14.3	54	珪質頁岩	横型
	64	削器	II	cd	4	49.8	23.9	8.2	9.7	—	珪質頁岩	縦長剥片素材
	65	削器	II	bc	5	(40.6)	29.2	11.5	(14.9)	184	半透明頁岩	—
	66	削器	II	aa	5	57.1	24.2	8.4	14.9	173	珪質頁岩	縦長剥片素材
	67	削器	II	bd	1	58.1	25.6	6.1	11.4	25	半透明頁岩	縦長剥片素材
	68	削器	II	cd	4	(45.7)	31.0	8.2	(8.2)	—	珪質頁岩	—
22	69	削器	II	bb	3	72.0	46.0	16.6	43.2	12	珪質頁岩	縦長剥片素材
	70	削器	II	cc	5	(42.6)	(40.0)	7.2	(12.1)	—	珪質頁岩	中央折損
	71	尖頭器	II	ab	5	(50.6)	30.1	9.2	(14.6)	185	珪質頁岩	中央折損
	72	搔器	II	cd	6	(35.0)	(46.7)	6.0	(14.3)	—	珪質頁岩	—
	73	楔形石器	II	bd	5	32.6	25.8	9.9	10.1	—	珪質頁岩	—
	74	筈状石器	II	dc	5	53.0	29.8	13.8	23.9	58	珪質頁岩	アスファルト痕
	75	筈状石器	II	ab	5	60.4	32.9	10.5	23.4	132	珪質頁岩	—
	76	筈状石器	II	cb	5	71.0	32.9	11.6	27.3	37	珪質頁岩	—
	77	異形石器	II	bd	4	7.1	16.9	2.1	0.6	181	半透明頁岩	—
	78	石斧	II	bd	4	(18.4)	17.4	8.0	(5.0)	—	硬質泥岩	小形
	79	石斧	II	bb	4	(29.5)	17.3	8.1	(8.2)	182	硬質泥岩	小形
	80	石斧	II	ad	5	(65.4)	(30.8)	32.5	(101.0)	187	安山岩	定角式
	81	石斧	II	bd	3-4	(74.6)	(43.0)	25.7	(64.0)	171	硬質砂岩	刃部接合
	82	石斧	II	dd	3-4	(28.7)	26.7	30.5	(21.5)	—	安山岩	定角式
	83	石斧	II	dc	2	(35.8)	39.4	19.7	(46.9)	—	安山岩	定角式
	84	円盤状石製品	II	bd	4	47.6	44.2	12.3	41.0	168	安山岩	周辺部整形
	85	石鏃	II	cd	3	47.4	36.2	14.5	33.4	47	硬質砂岩	切目石鏃
23	86	石皿	I	cd	3	192.0	288.0	78.0	6190.0	24	安山岩	—
	87	凹石	I	dd	5	98.2	72.8	65.1	592.5	115	安山岩	両面に敲打痕
	88	凹石	II	bd	F2	98.3	74.2	44.4	478.8	192	安山岩	磨石兼用
	89	凹石	I	be	4	105.5	74.0	47.5	496.1	—	安山岩	両面・側面に敲打痕
	90	石棒	II	ac	3	(94.2)	102.6	83.4	(1210.0)	26	硬質砂岩	正面に凹痕
	91	砥石	II	cd	F3	(55.2)	70.8	33.0	(97.0)	194	硬質砂岩	有溝砥石
	92	凹石	II	cd	5	136.6	86.4	49.5	900.5	56	安山岩	磨石兼用
	93	凹石	I	bd	3	142.7	58.4	64.0	563.2	29	安山岩	3面に敲打痕
	94	石皿	II	ba	3	136.4	(175.8)	65.4	(2040.0)	17	安山岩	—
	95	砥石	II	bc	5	(72.0)	(135.6)	(44.1)	(430.0)	179	硬質砂岩	有溝砥石
	96	砥石	II	ab	5	(57.8)	(84.0)	(26.1)	(178.1)	137	硬質砂岩	—

表注 1. 石材の安山岩は西鳥海火山帯のステージIIa期(9~16万年)起源の[含かんらん石、角せん石、複輝石安山岩]が用いられている。





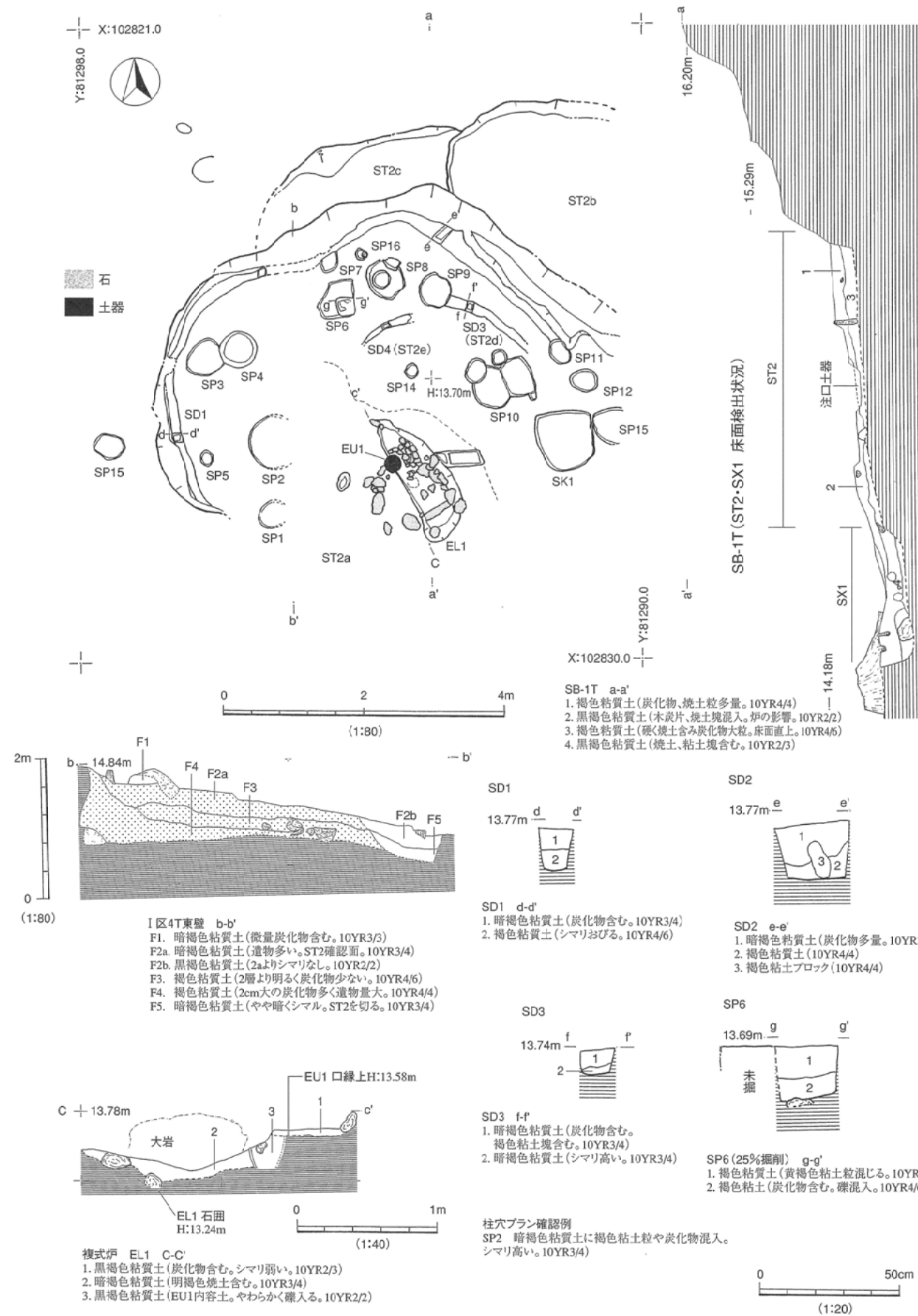


図7 ST2竪穴住居跡の実測図

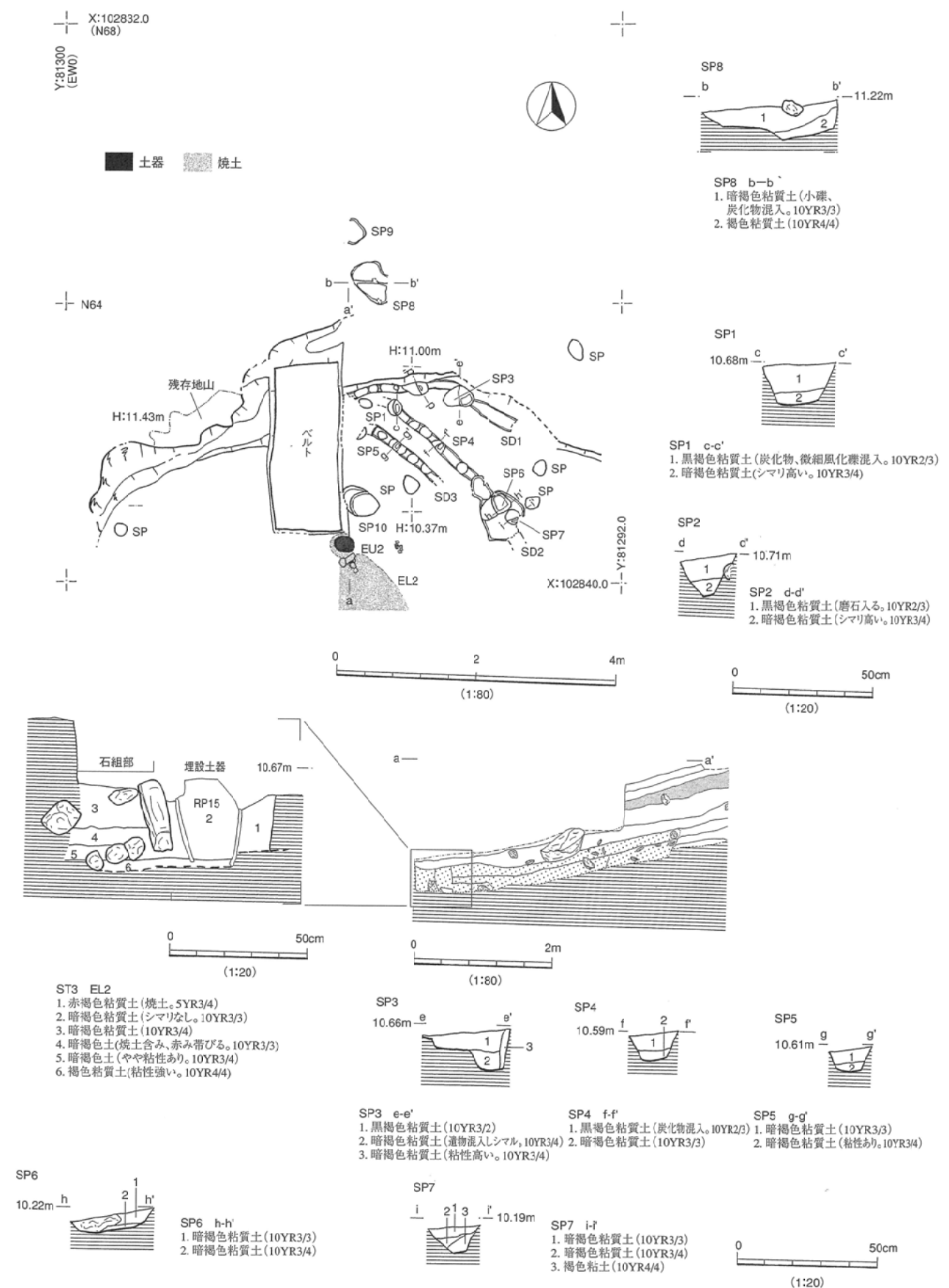


図8 ST3竪穴住居跡の実測図

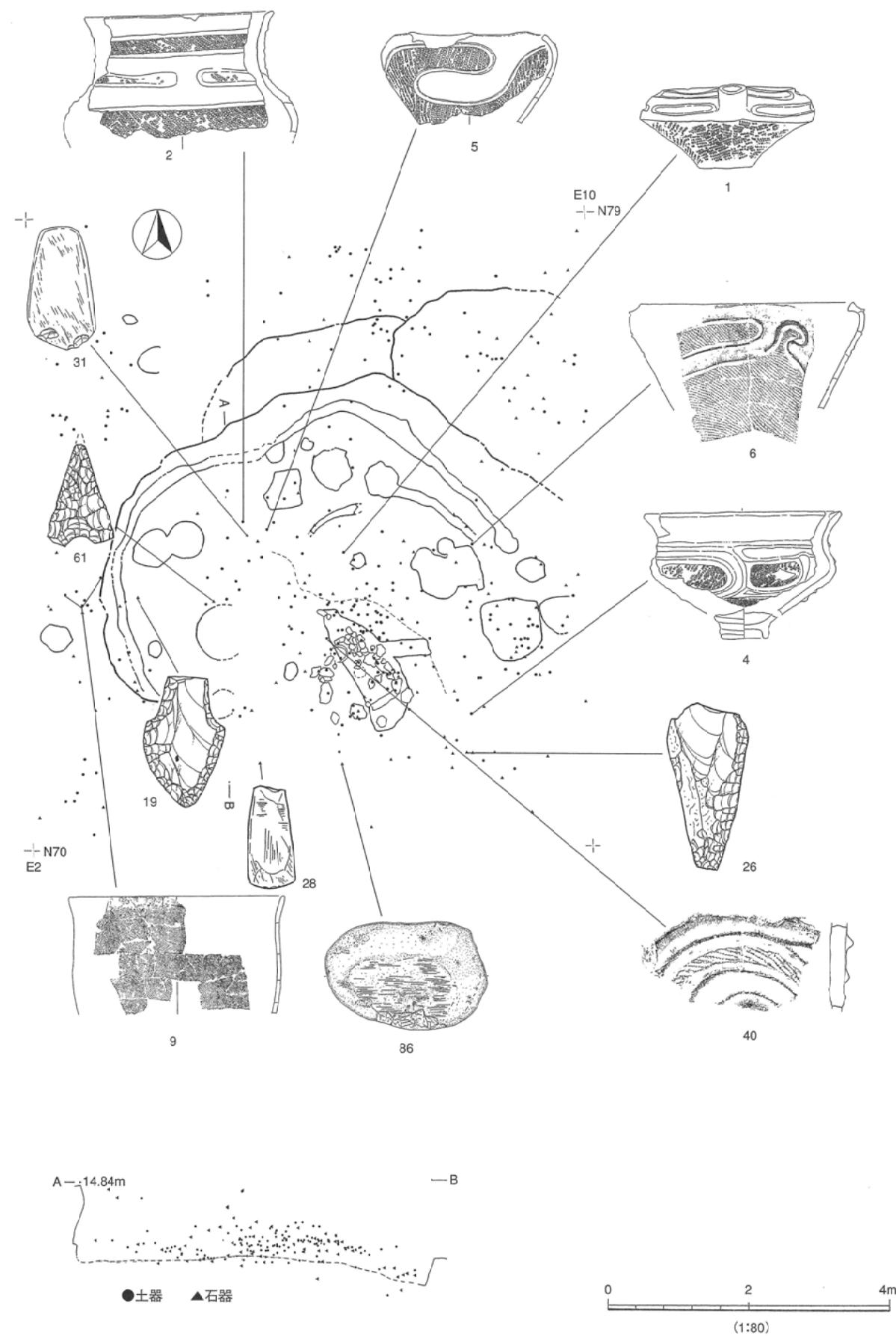


図9 ST2と周辺の出土遺物



図10 ST3と周辺の出土遺物

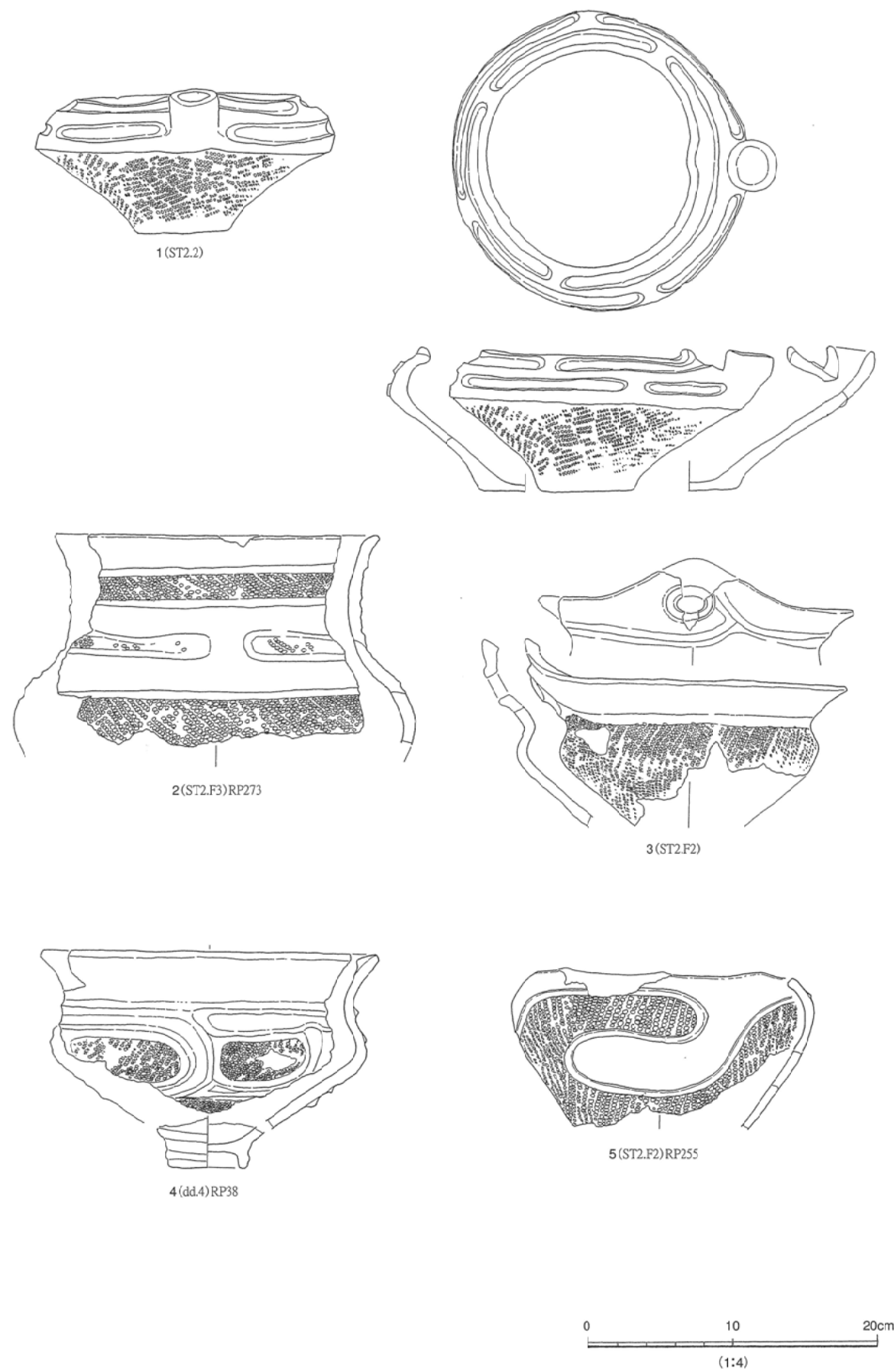


図11 第I調査区の出土土器・土製品(1)

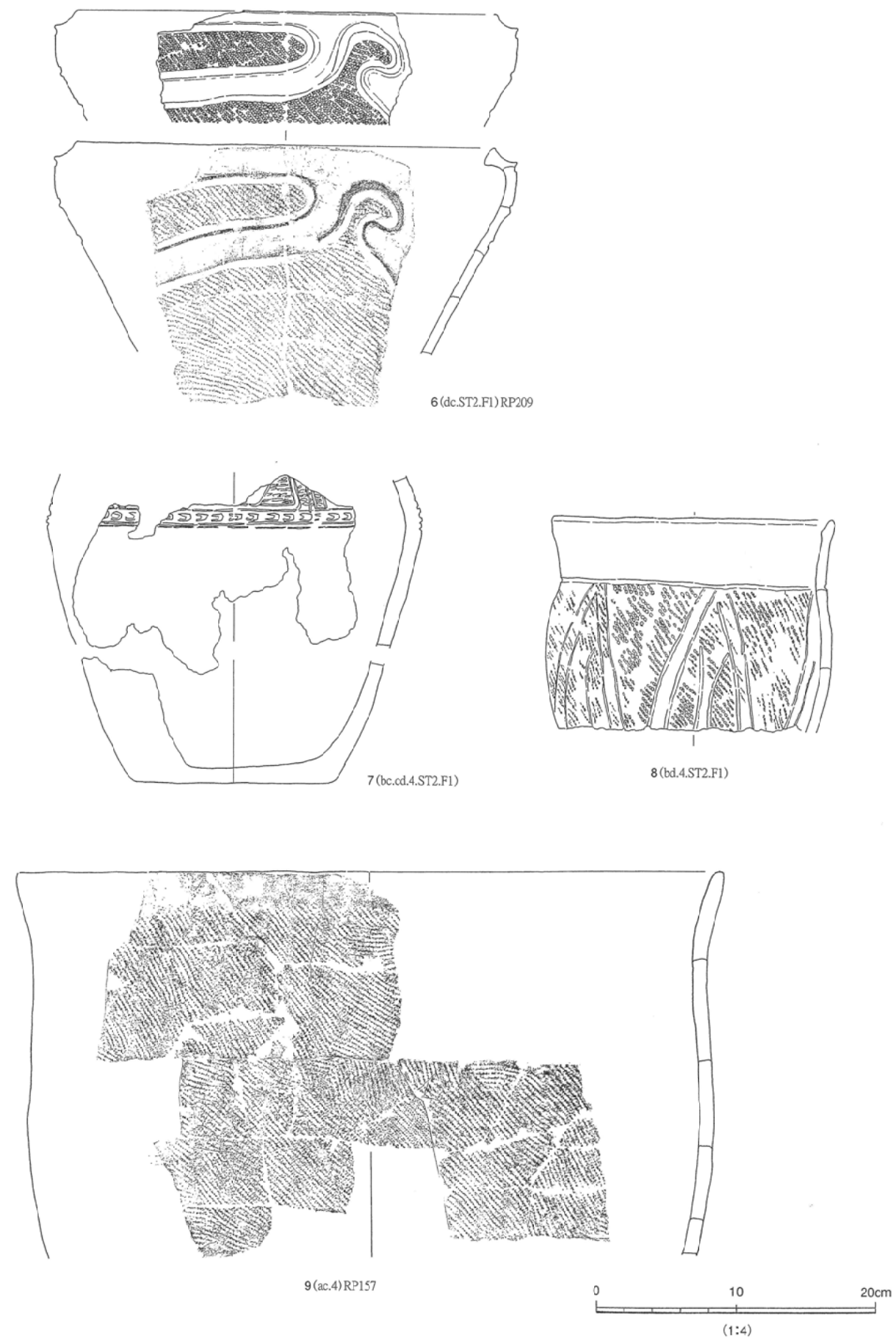


図12 第I調査区の出土土器・土製品(2)



図13 第I調査区の出土土器・土製品(3)

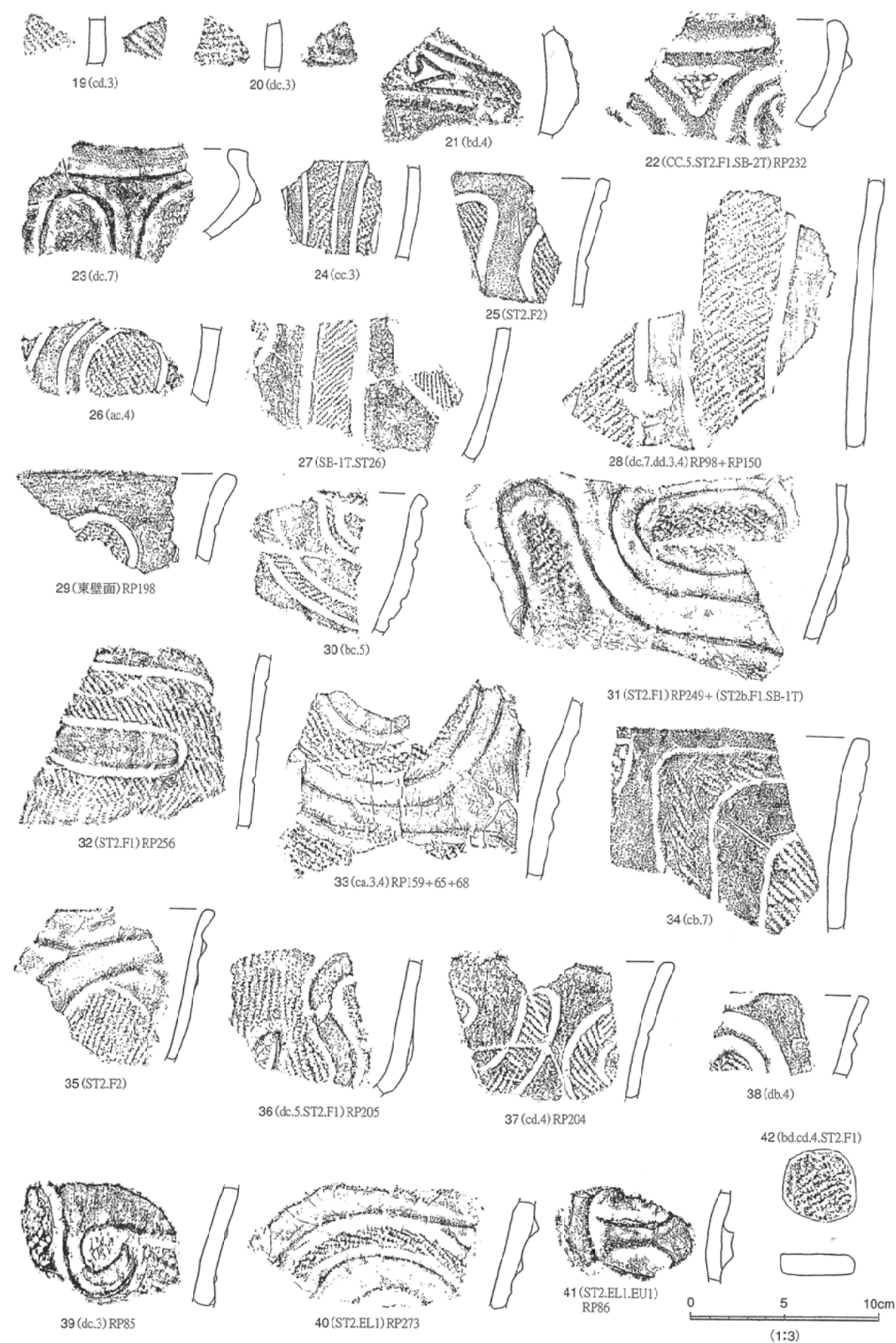


図14 第I調査区の出土土器・土製品(4)

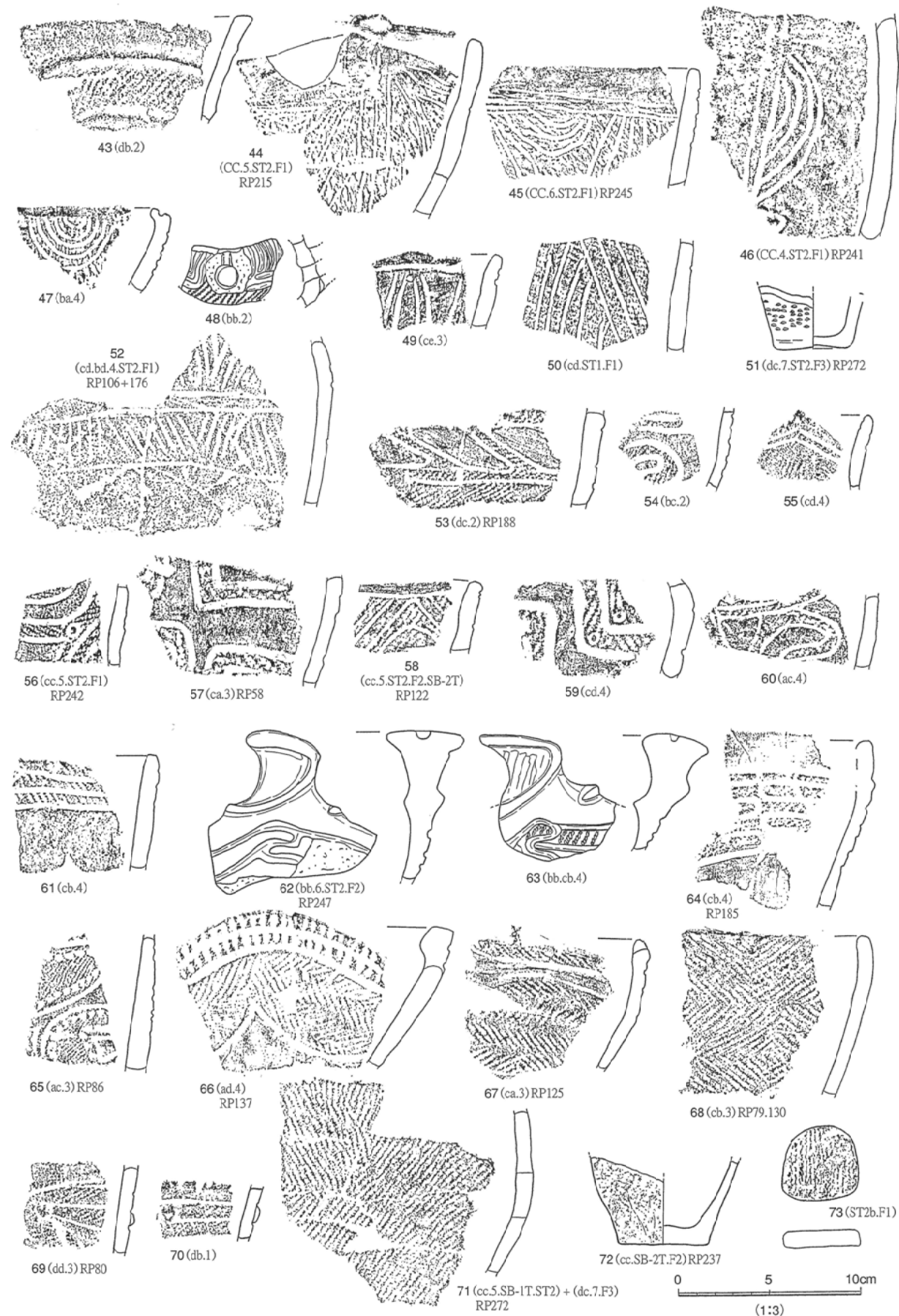


図15 第Ⅰ調査区の出土土器・土製品(5)

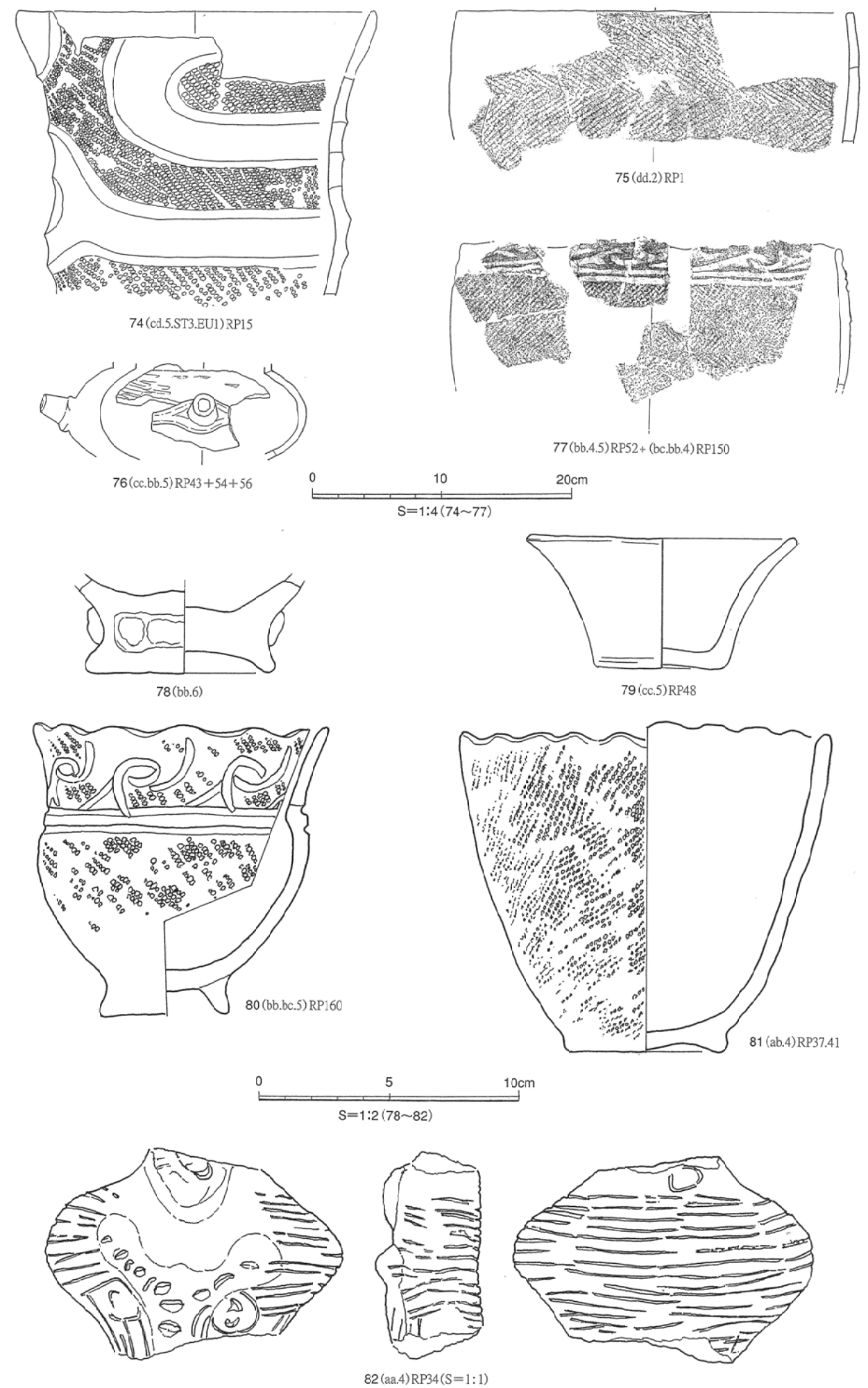


図16 第Ⅱ調査区の出土土器・土製品(1)

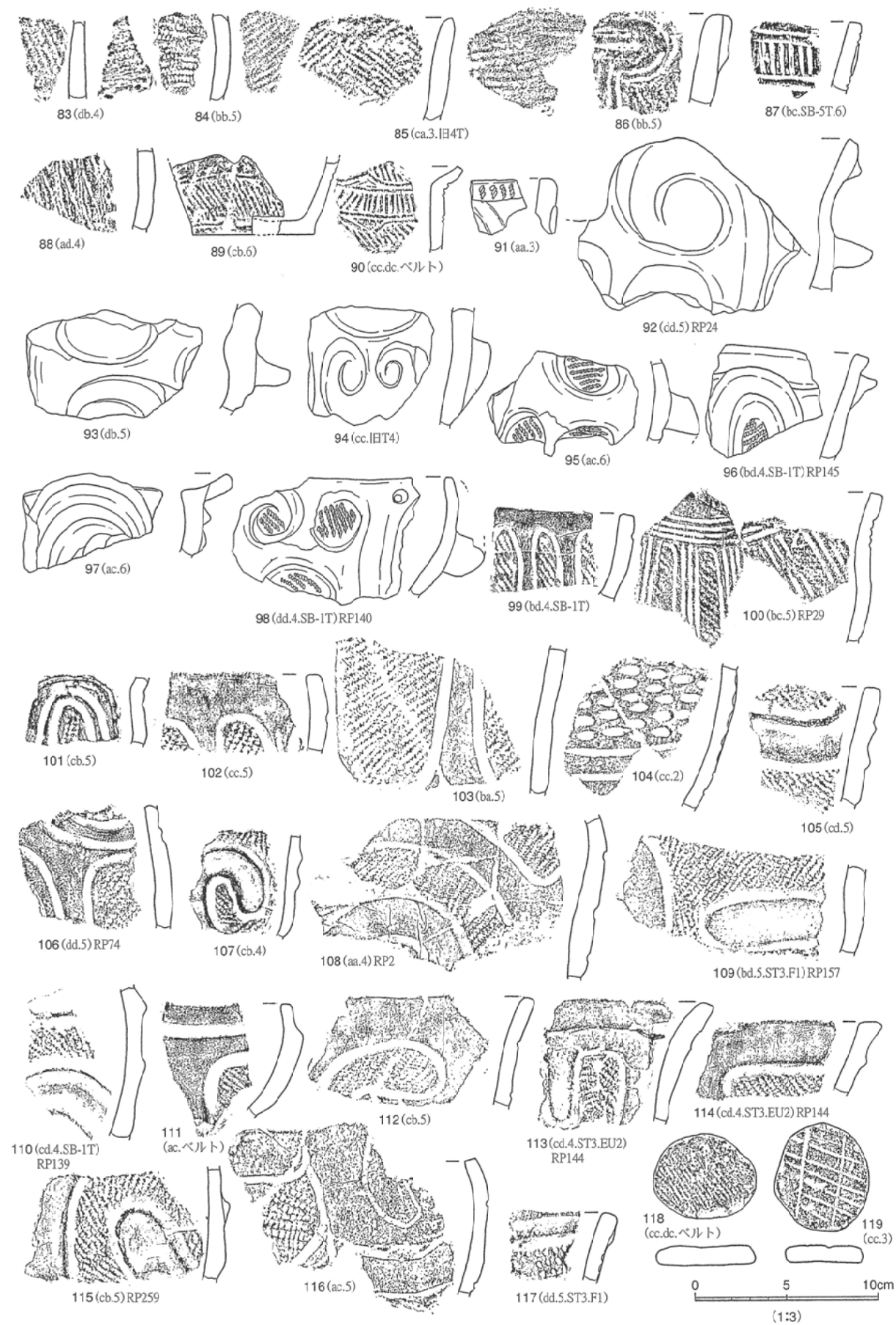


図17 第Ⅱ調査区の出土土器・土製品(2)

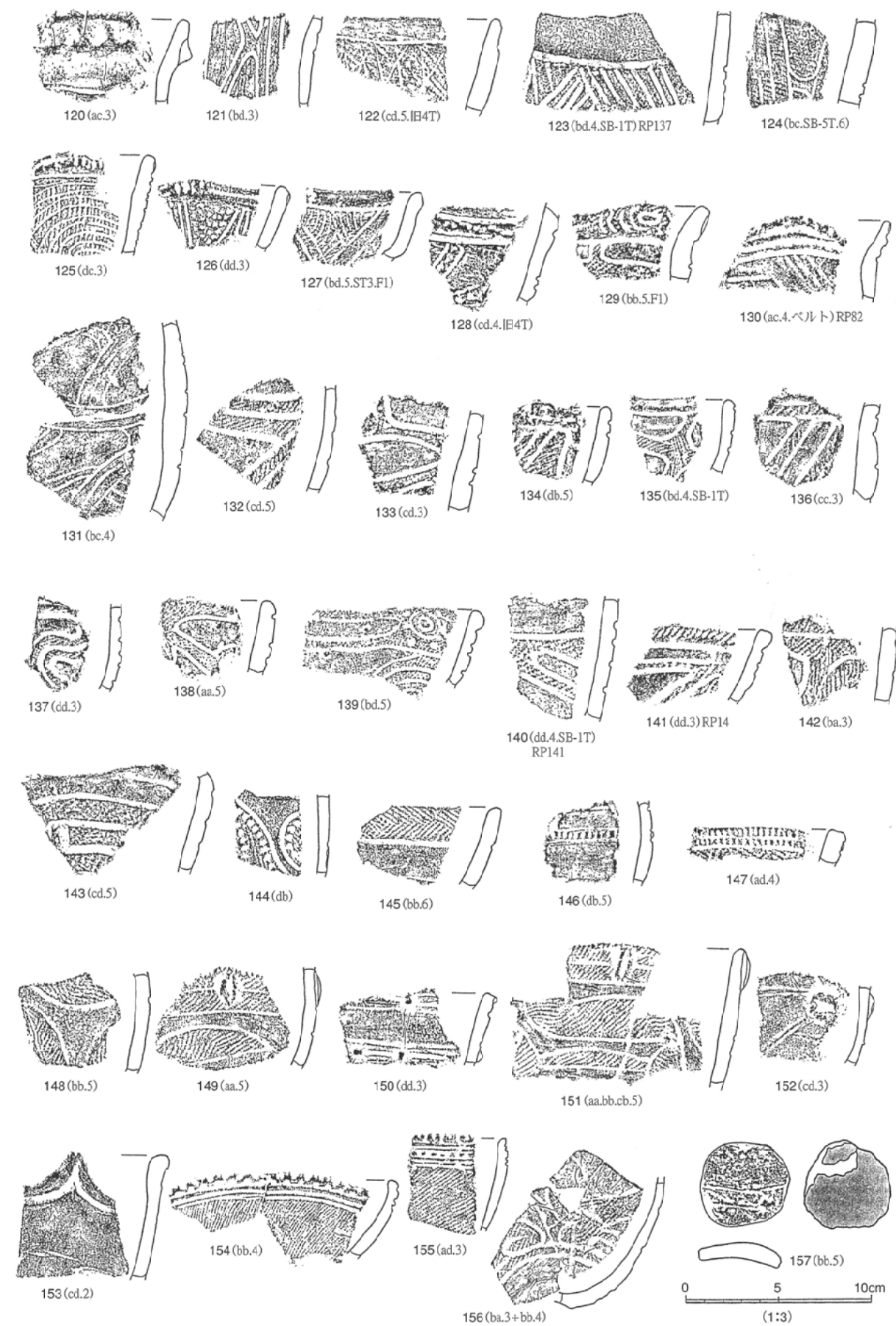


図18 第Ⅱ調査区の出土土器・土製品(3)

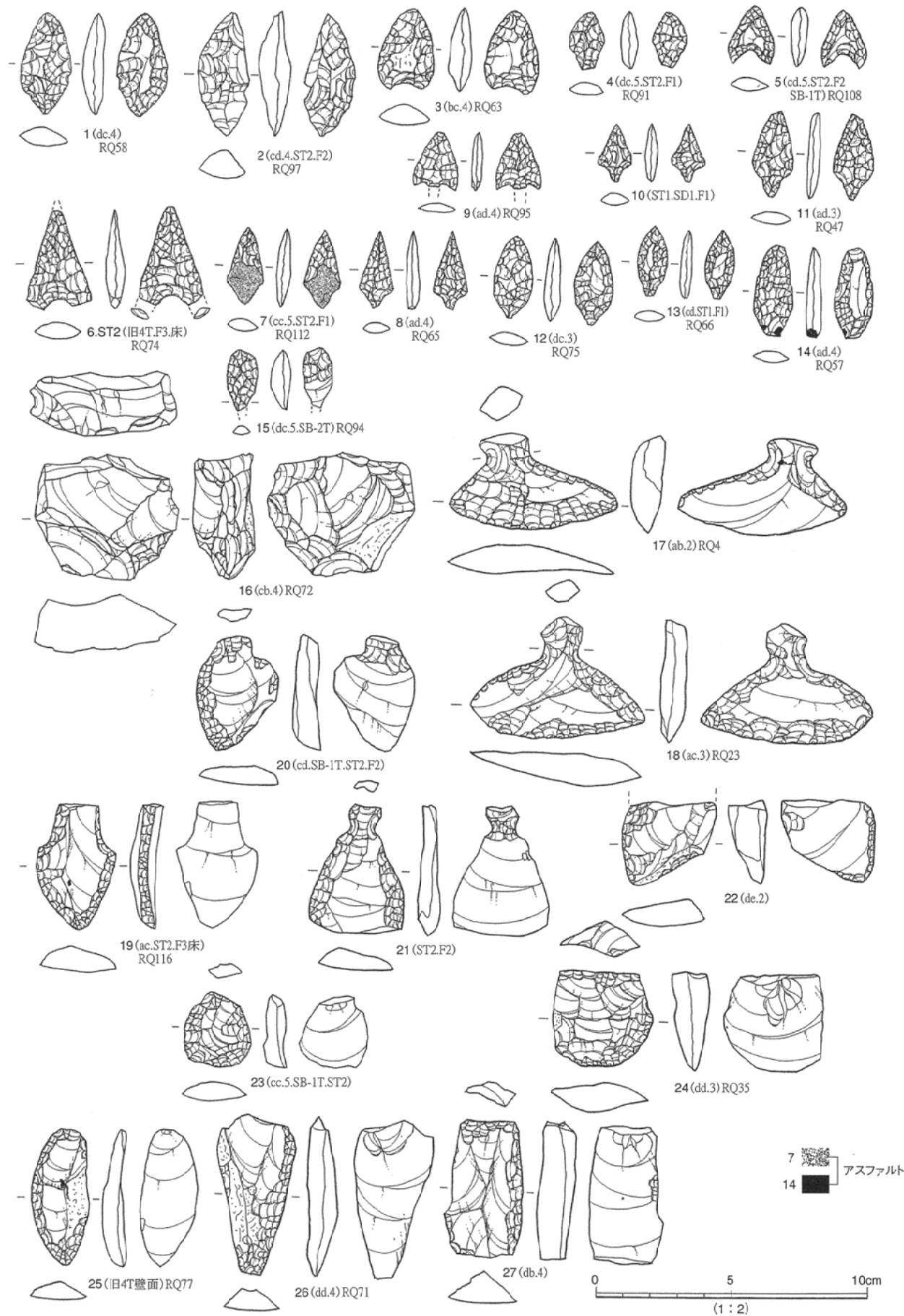


図19 第I調査区の出土石器(1)

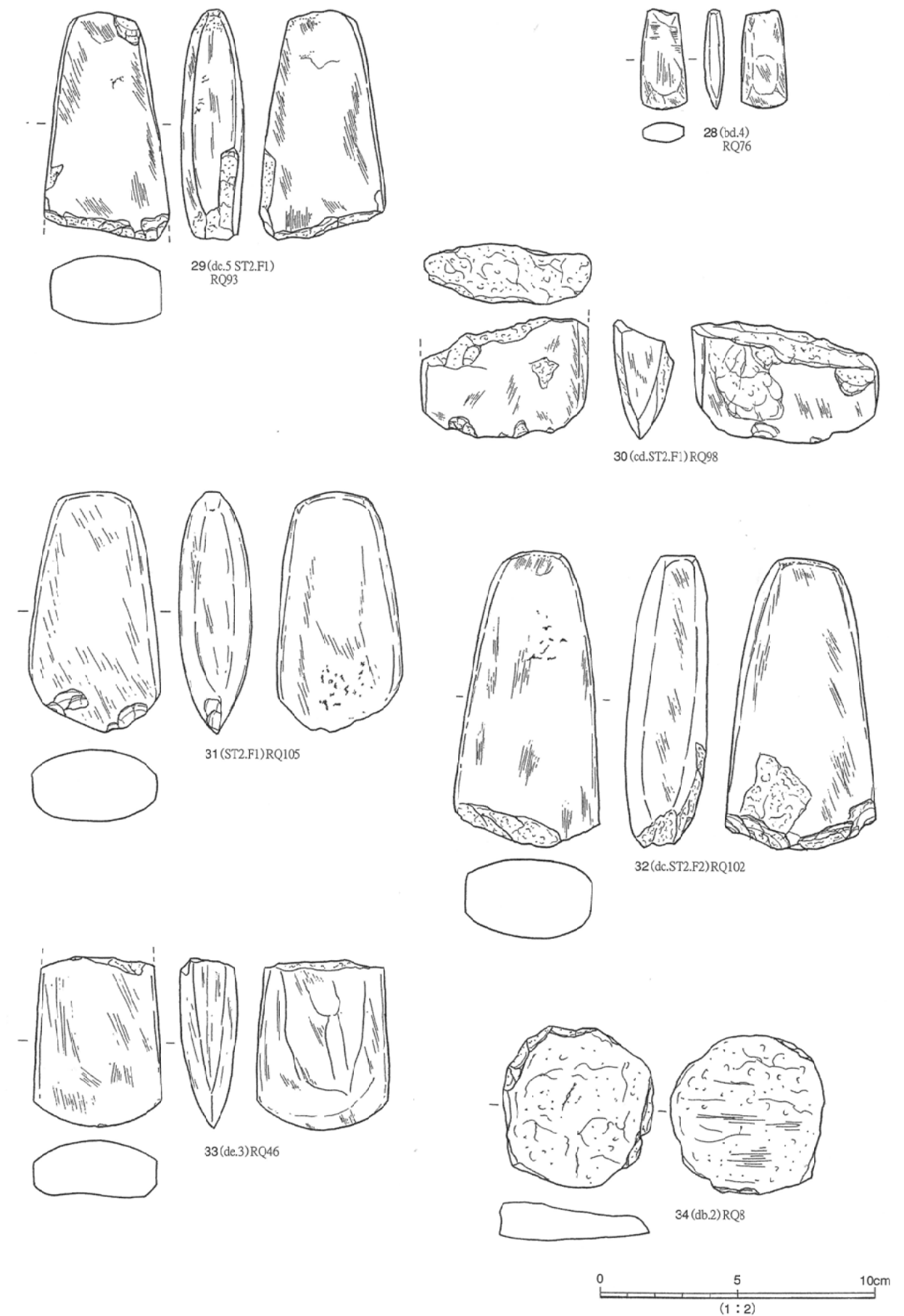


図20 第I調査区の出土石器(2)

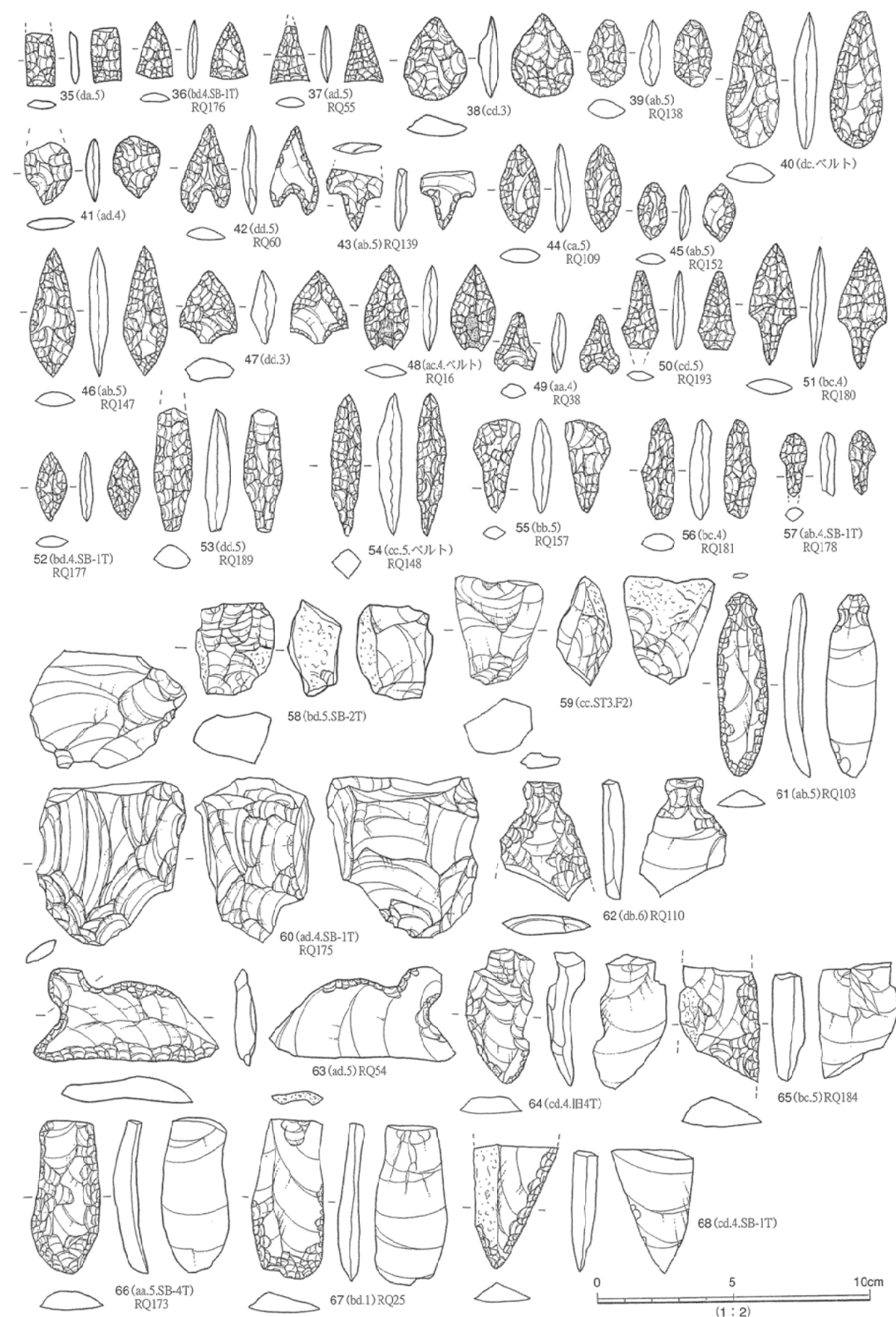


図21 第Ⅱ調査区の出土石器(1)

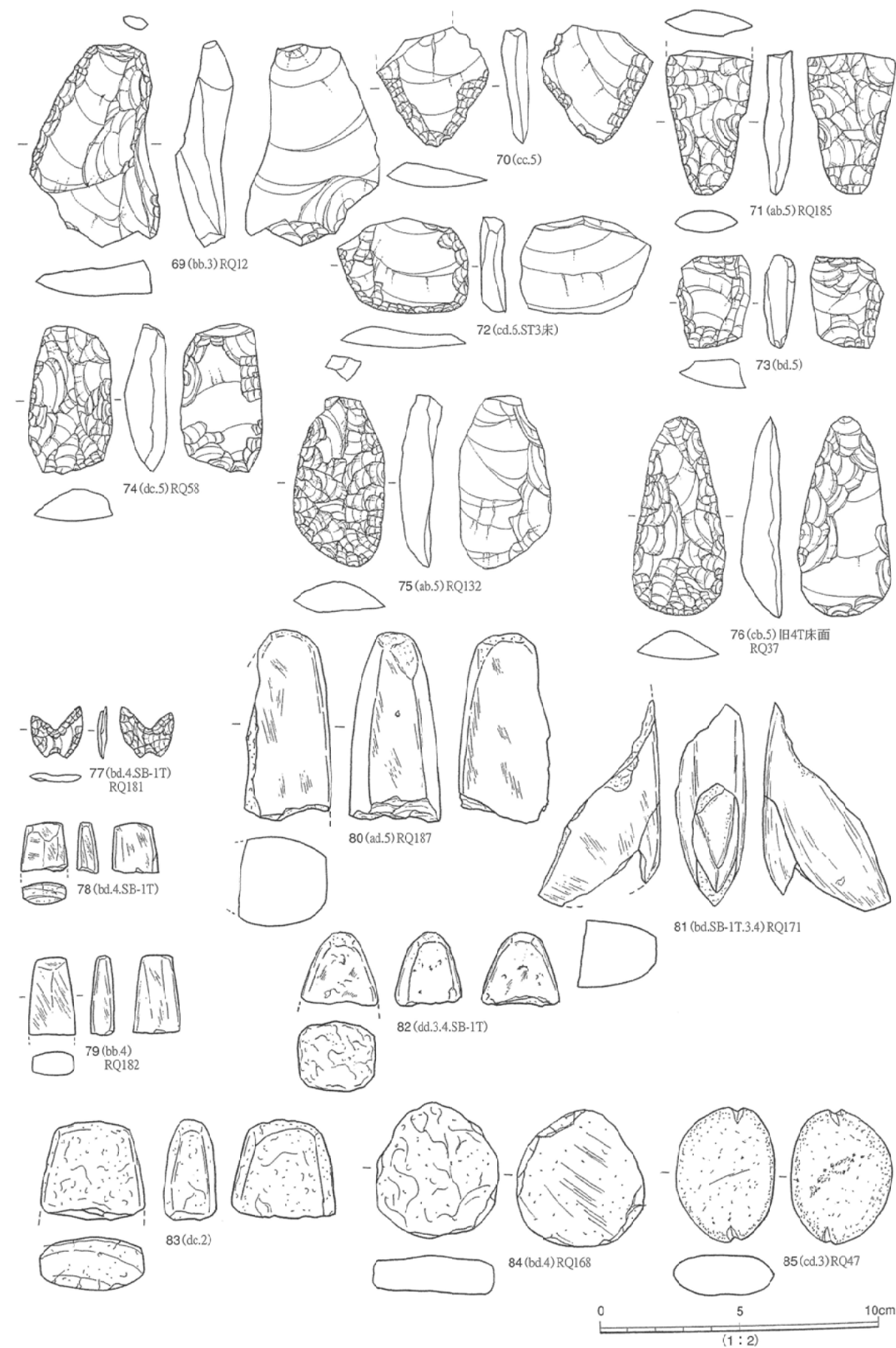


図22 第Ⅱ調査区の出土石器(2)

写真図版

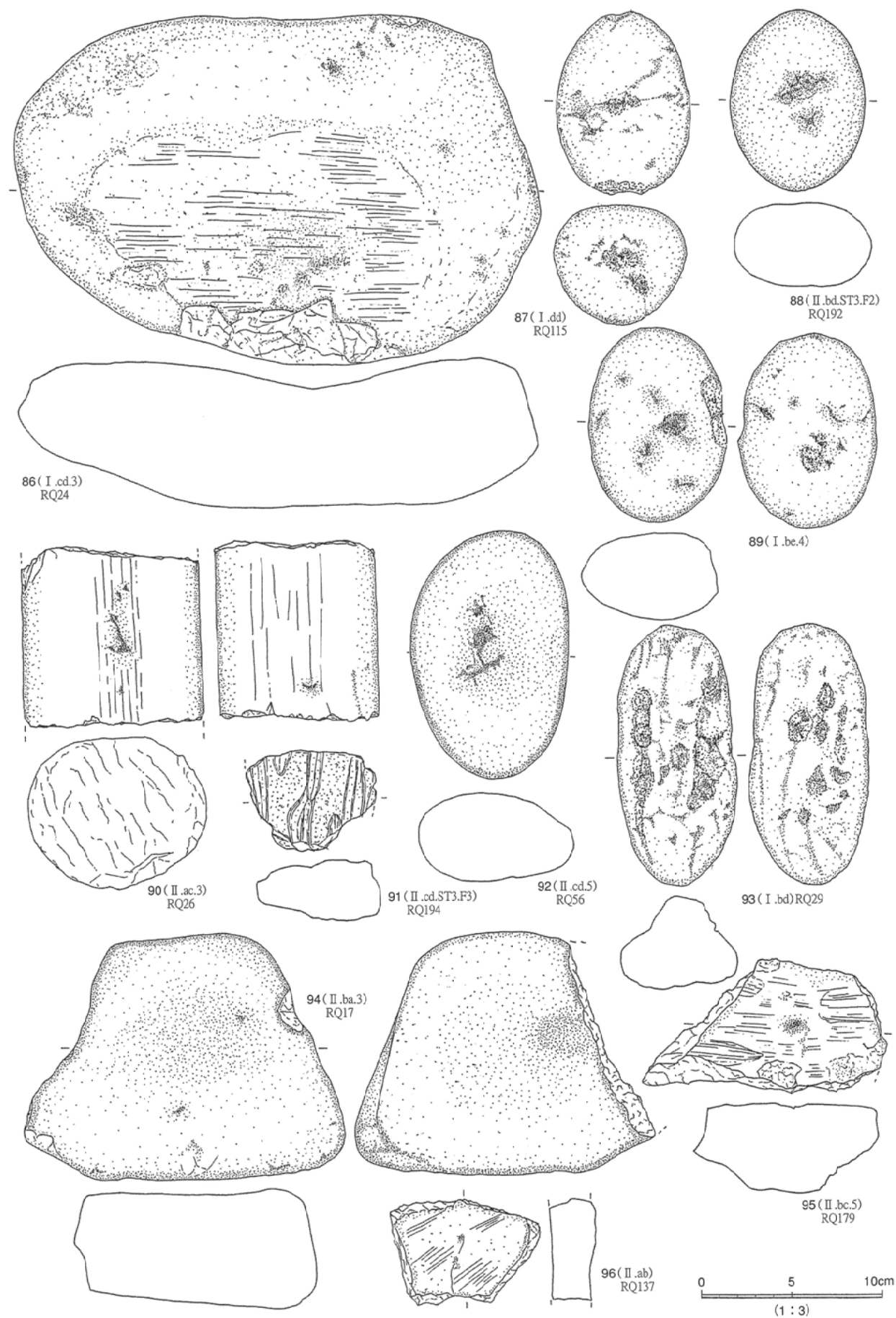


図23 第Ⅰ・Ⅱ調査区の出土石器



1 ST2プラン確認(←西)



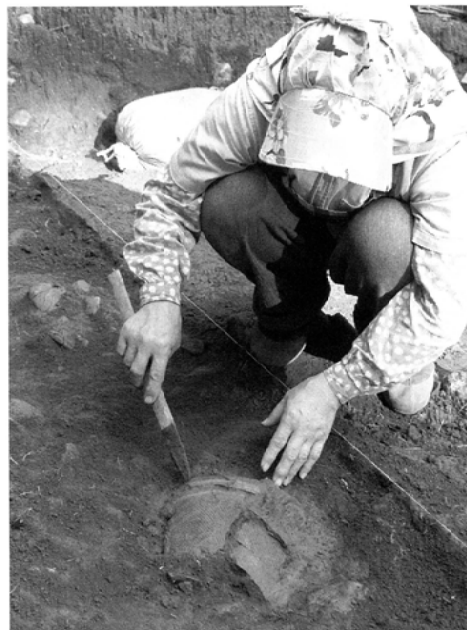
2 ST2北壁確認(←東)



6 ST2北西隅



8 ST2覆土遺物出土状況(←南)



3 土器(6) 出土状況



4 土器(6)



5 柱穴SP4



7 周溝SD1・柱穴SP3・4 検出状況(←南)



9 注口土器(1)出土状況



10 複式炉(←南西)



11 埋設土器EU1(←東)



12 EL2精査(半截)



13 ST2:周溝、柱穴、複式炉検出(←東)



14 柱穴10(南から)



15 周溝SD1断面(e-e')



16 ST2近景(←南東)



17 ST2(←北)



18 石群の出土状況(←東)



19 旧トレンチ4の層序(←南)



20 異形石器(77)と土器



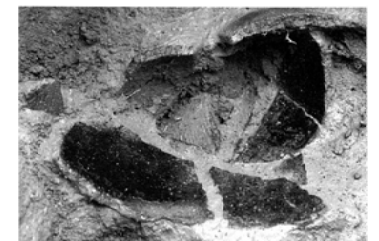
21 北壁層序(←南西)



22 複式炉EL2(←北東)



23 土偶出土状況



24 土器(81)出土状況



25 残存地山(←南東)



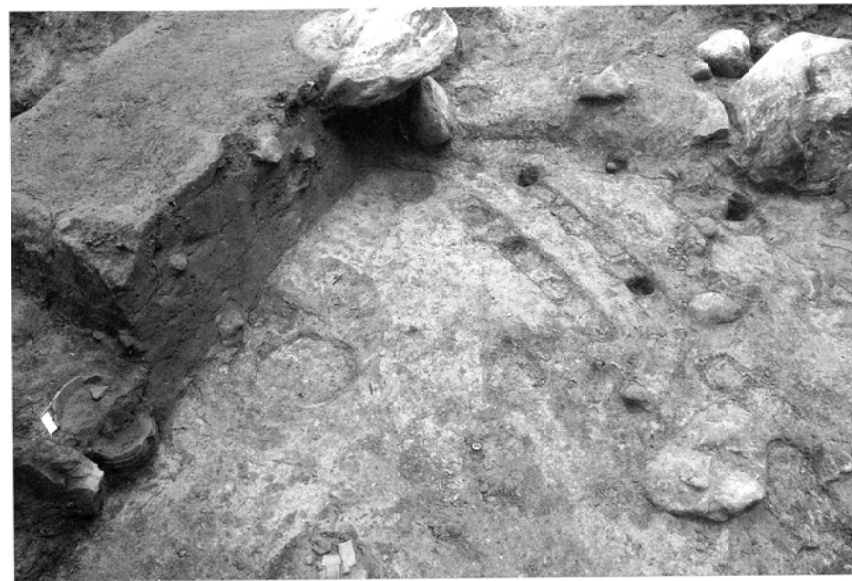
26 ST3竪穴北壁(←南)



27 周溝SD1・2・3(←南)



28 複式炉(←東)



29 ST3の遺構



31 土器(92)



30 柱穴半截:SP1・3(←南)



32 全景(←南)

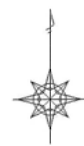


33 旧4T生活面の遺構(←南)



34 (空撮1)

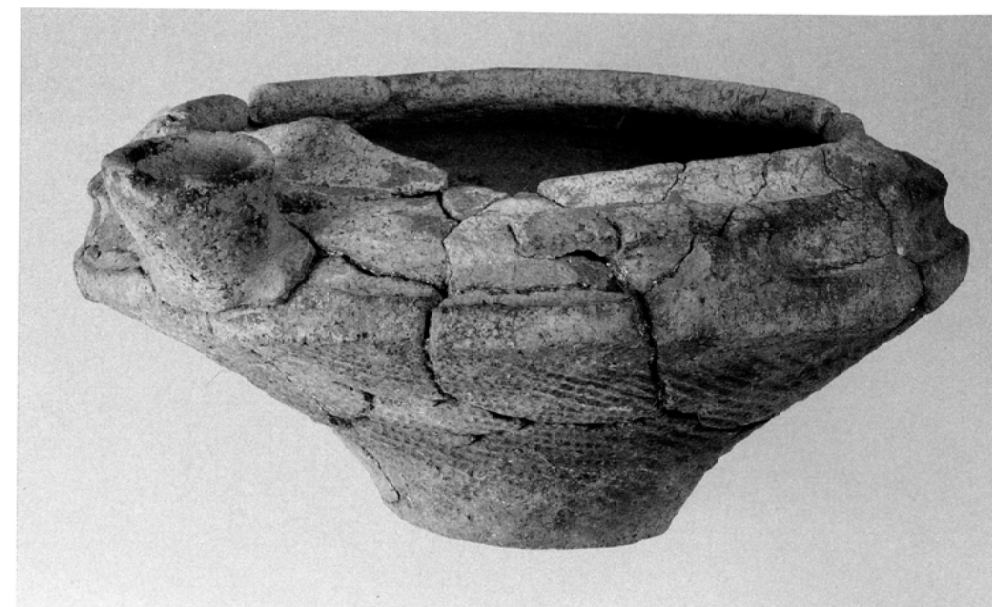
S=1:50



35 第Ⅱ調査区空撮

S=1:50

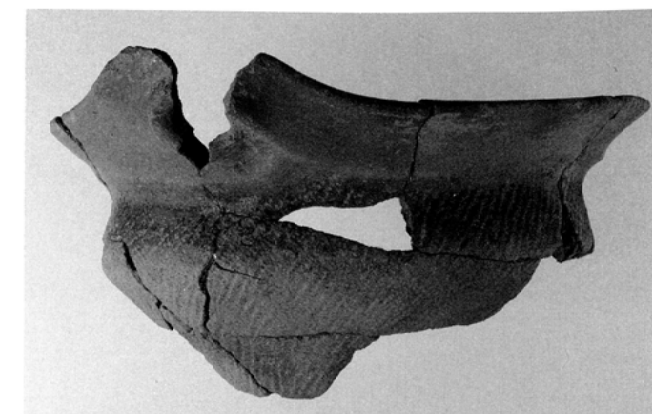
第Ⅱ調査区の遺構出土状況



36 注口土器(1)



37 壺(2)



38 鉢(3)

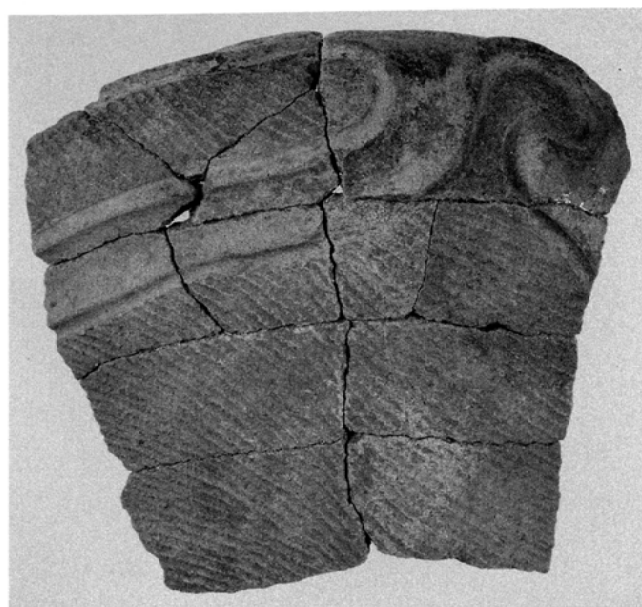


39 鉢(4)

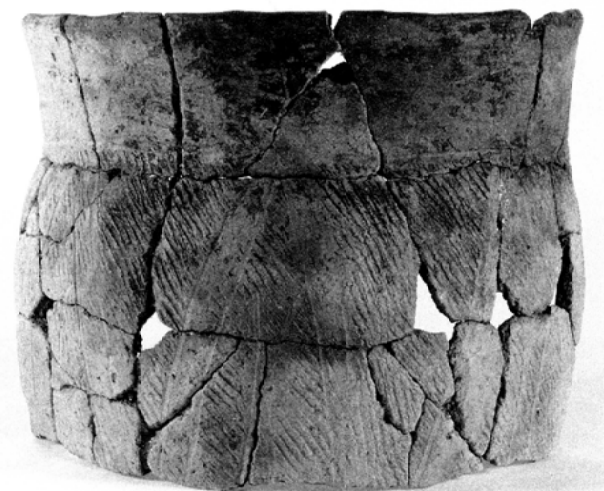


40 鉢(5)

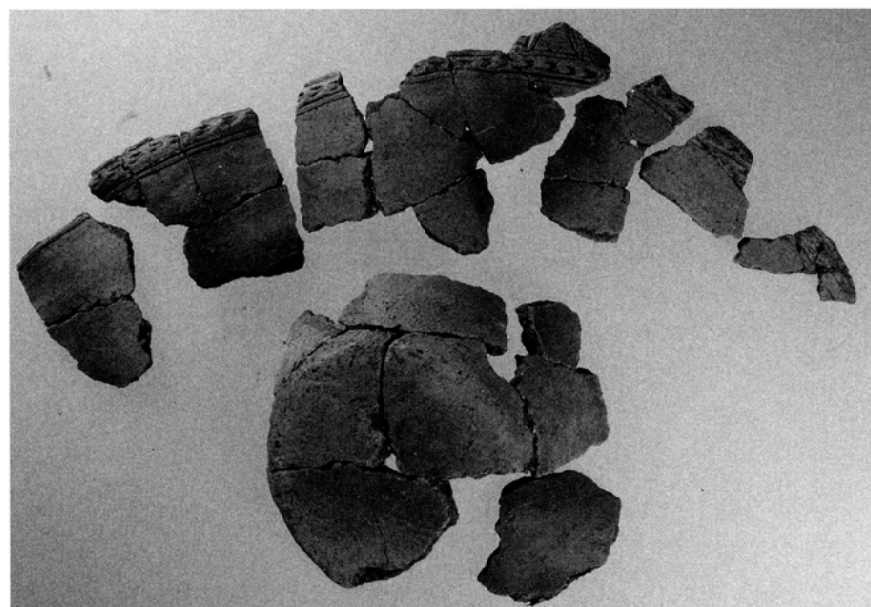
ST2出土の主要土器



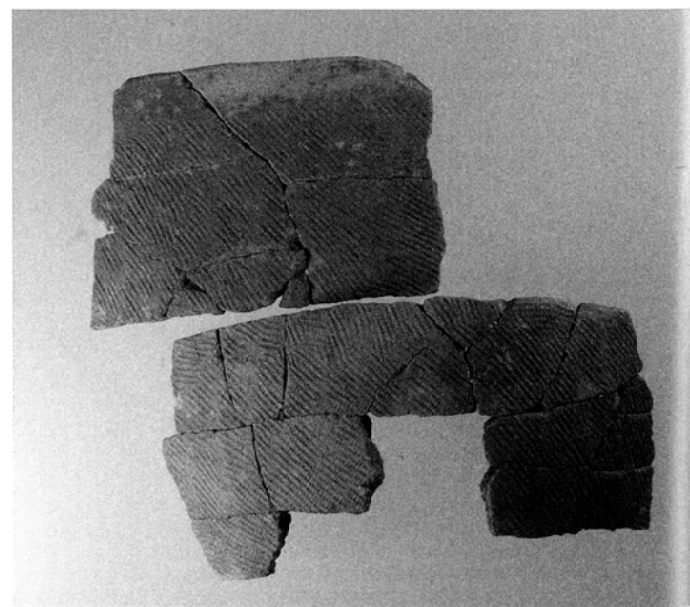
41 鉢(6)



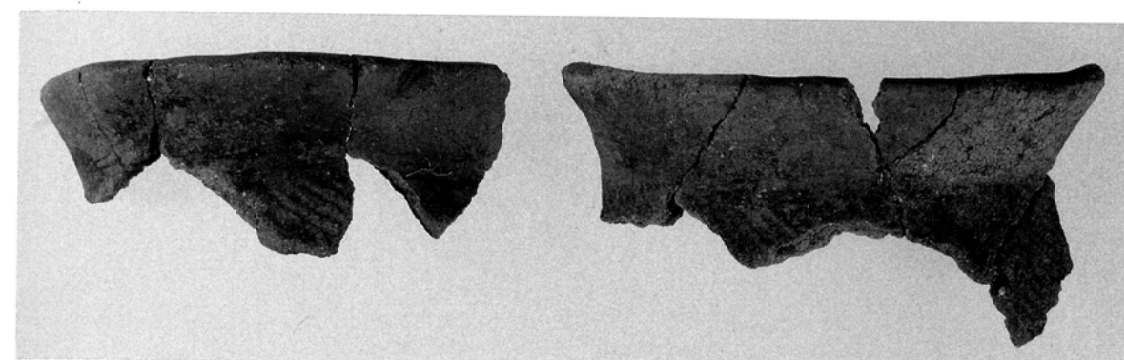
43 深鉢(8)



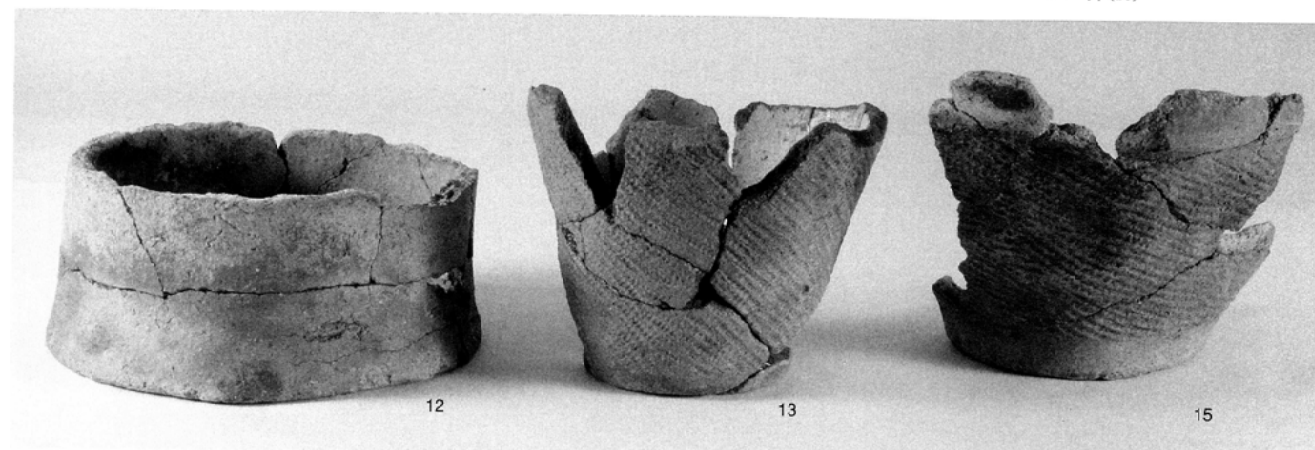
42 深鉢(7)



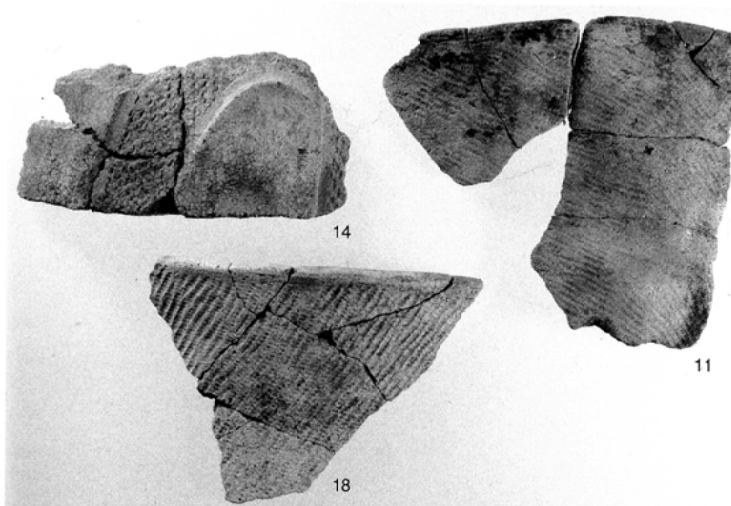
44 深鉢(9)



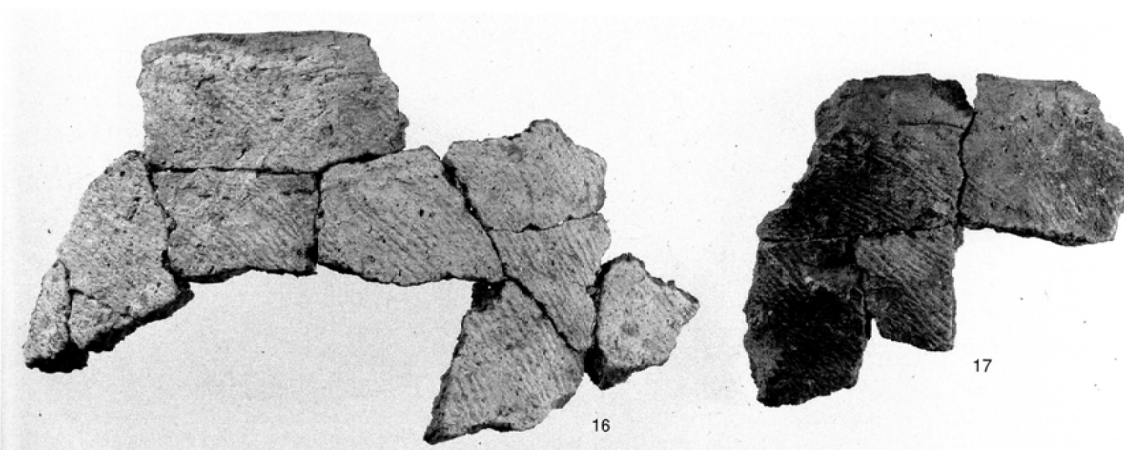
45 鉢(10)



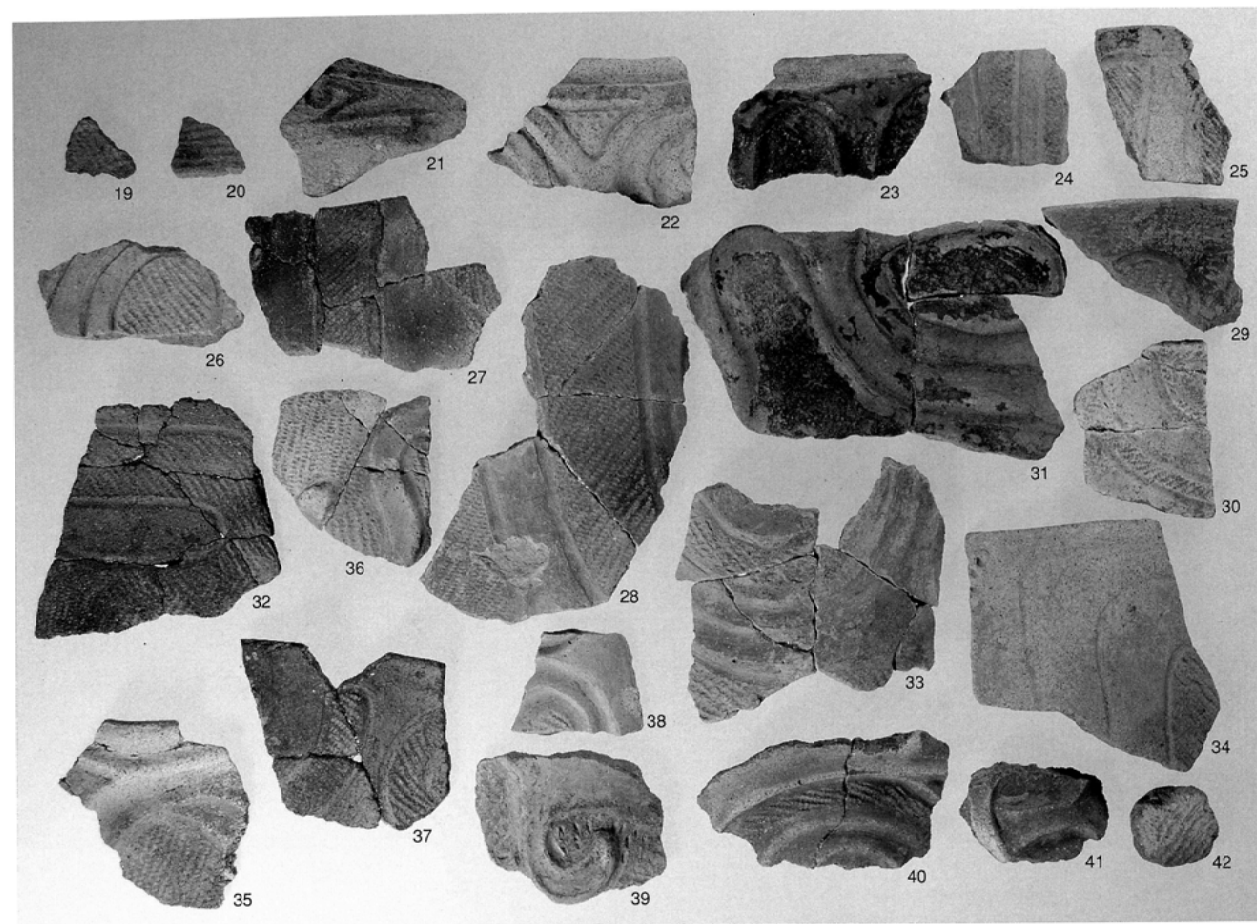
46 底部接合資料



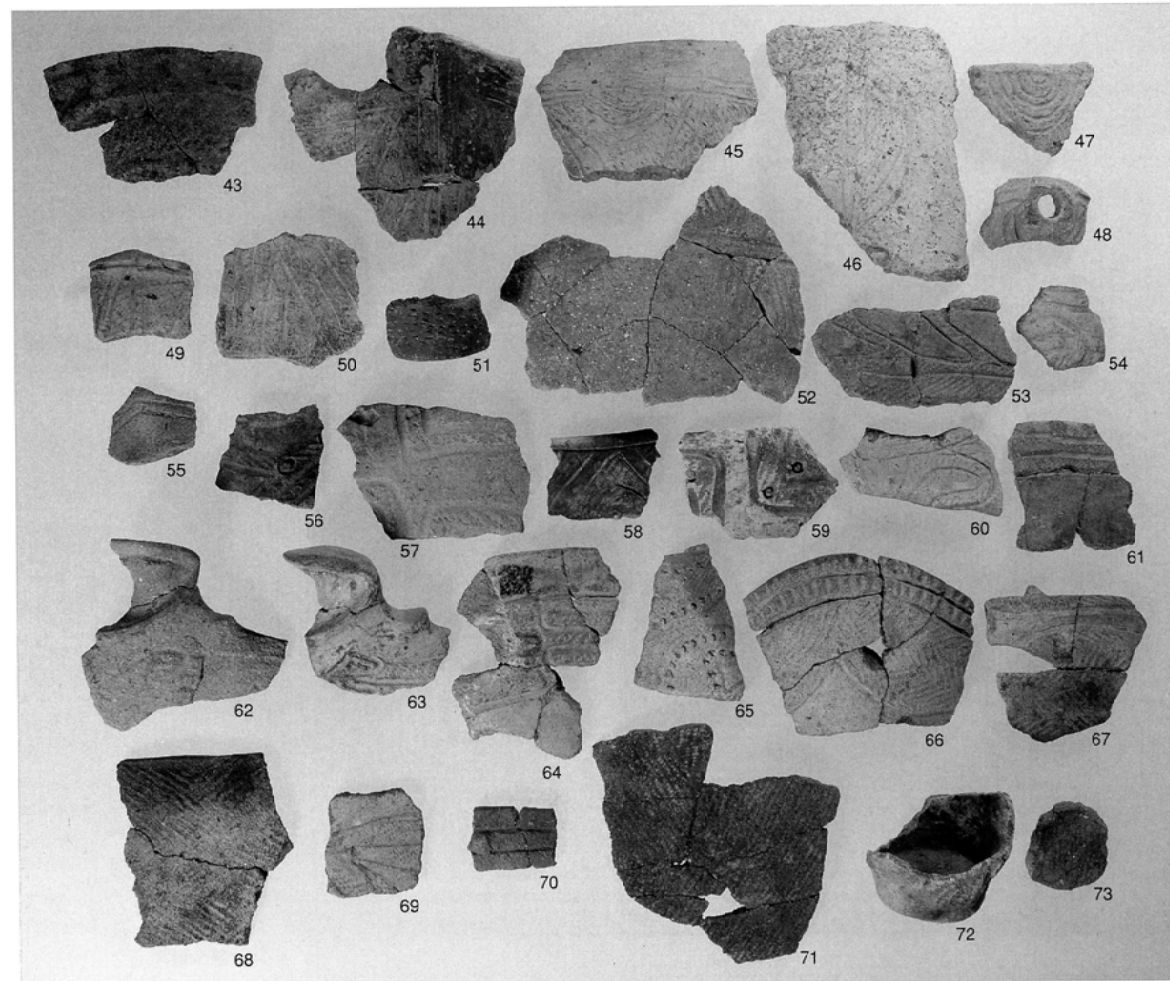
47 接合資料



48 接合資料

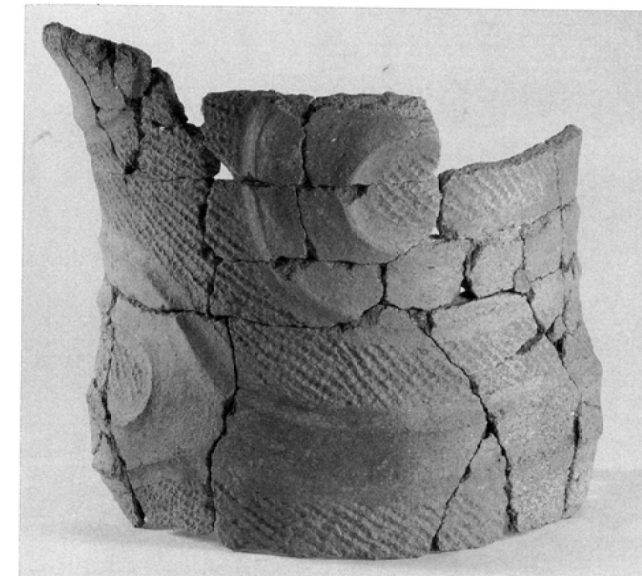


49 第I調査区の出土土器と土製品 I (19~42)



50 第I調査区の出土土器と土製品 2 (43~73)

第I調査区の出土土器と土製品



51 埋設土器(74)



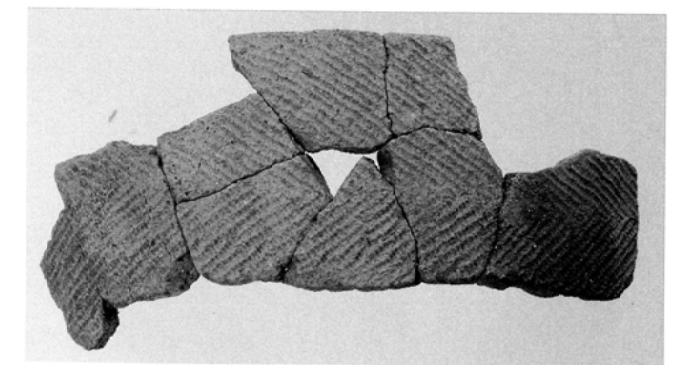
54 鉢(77)



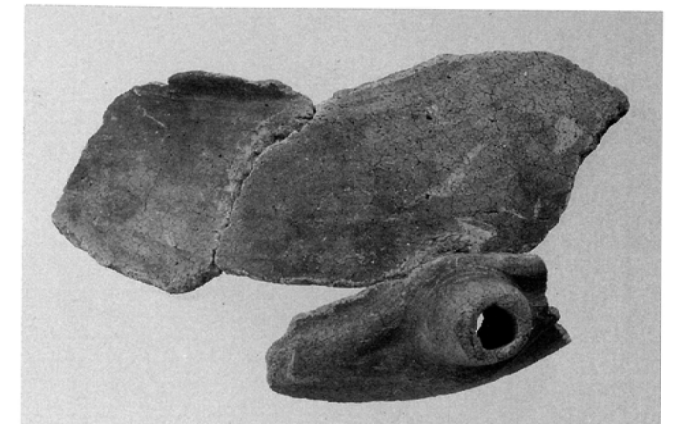
56 小型土器(79)



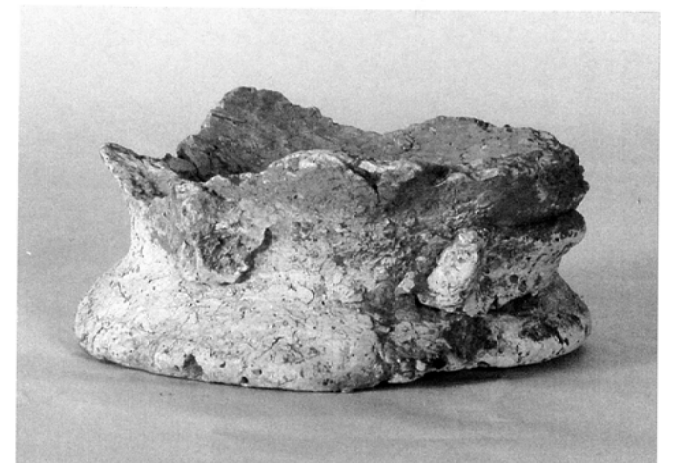
58 小鉢(81)



52 深鉢(75)



53 注口土器(76)

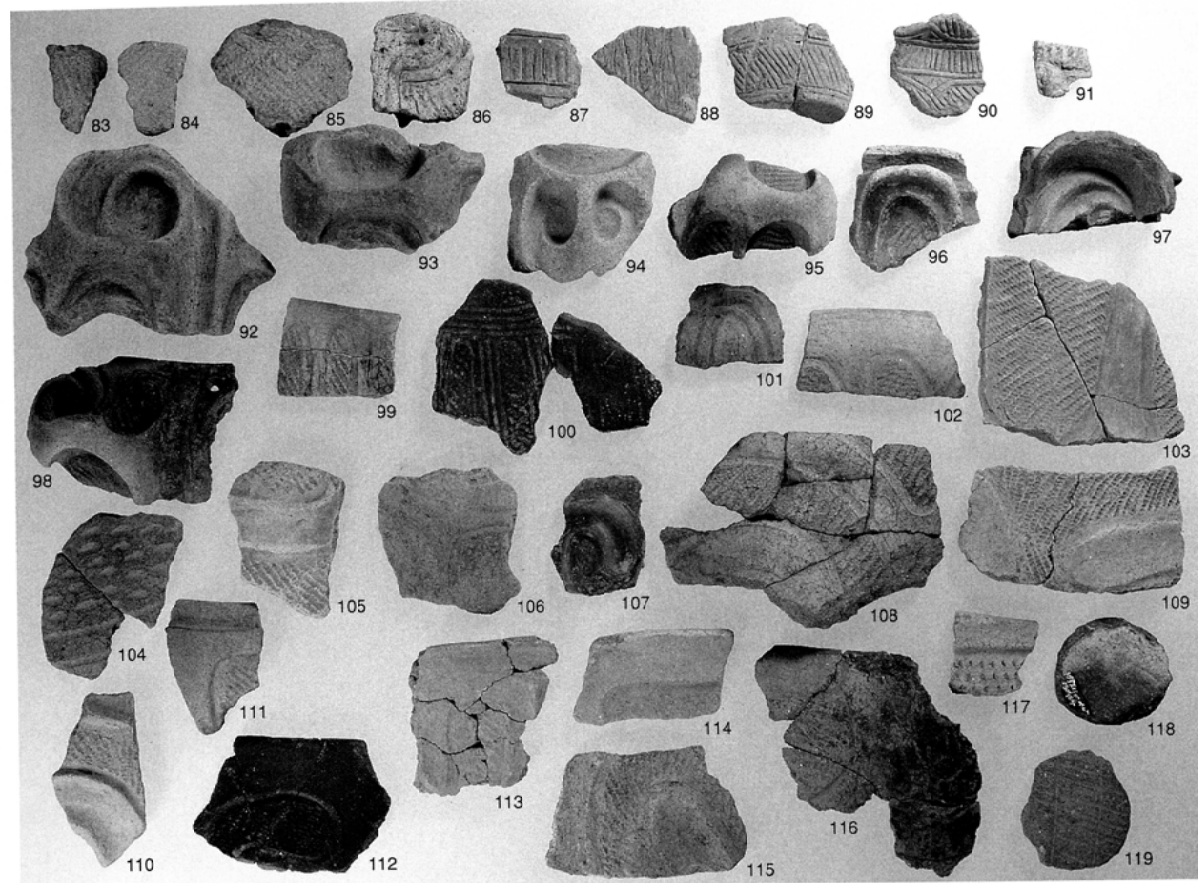


55 隆帯を貼る台付の底部(78)

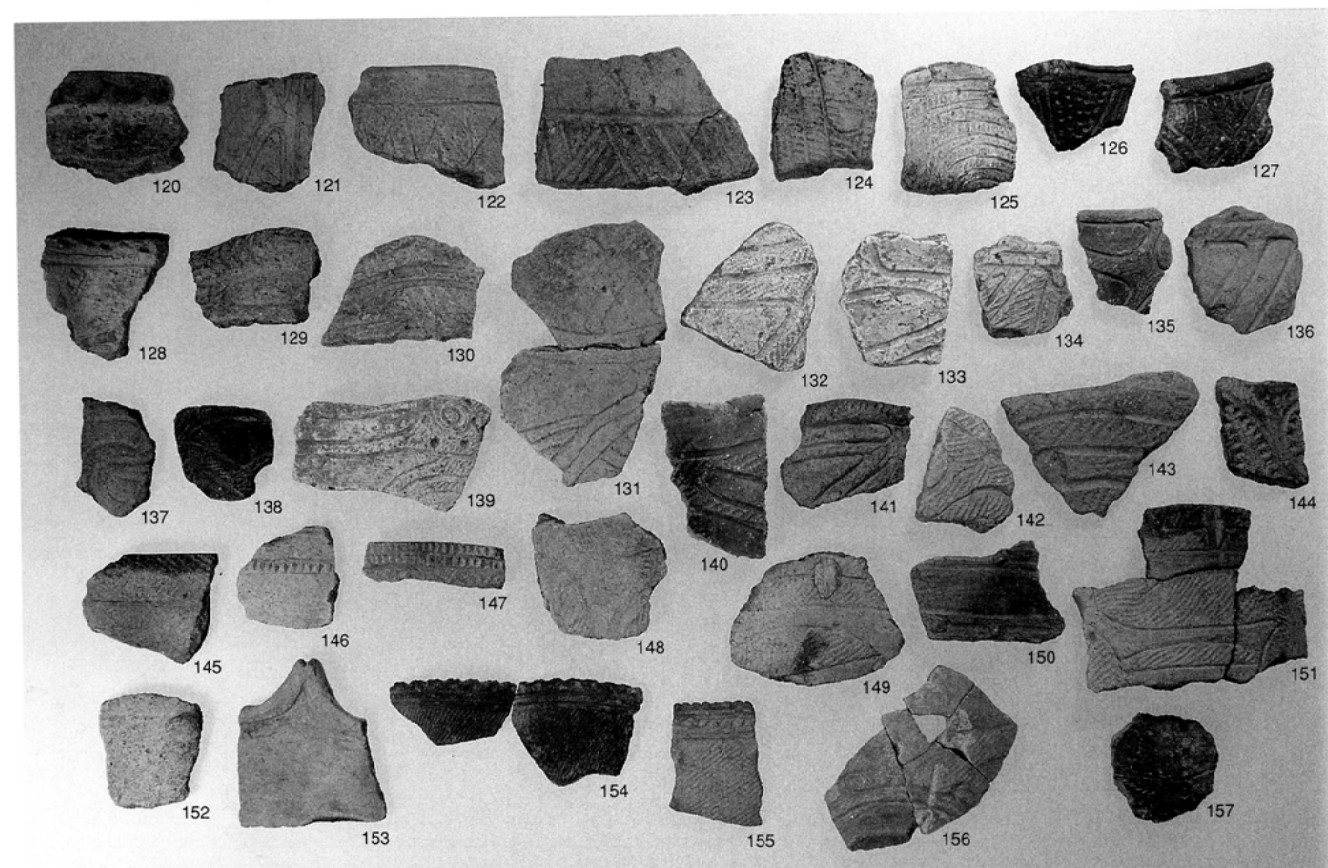


57 小鉢(80)

第II調査区出土の主要土器

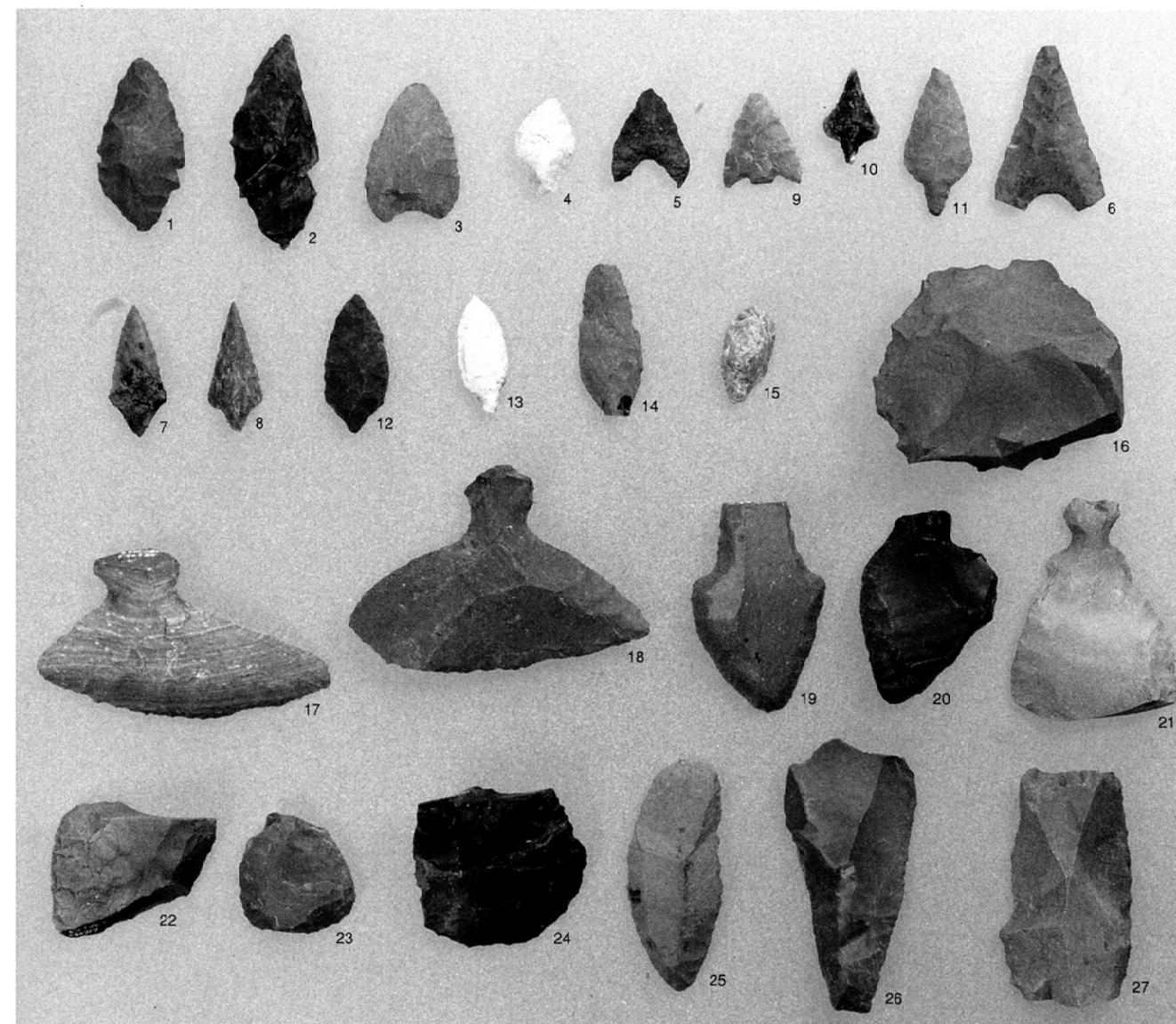


59 第Ⅱ調査区の出土土器と土製品 1 (83~119)

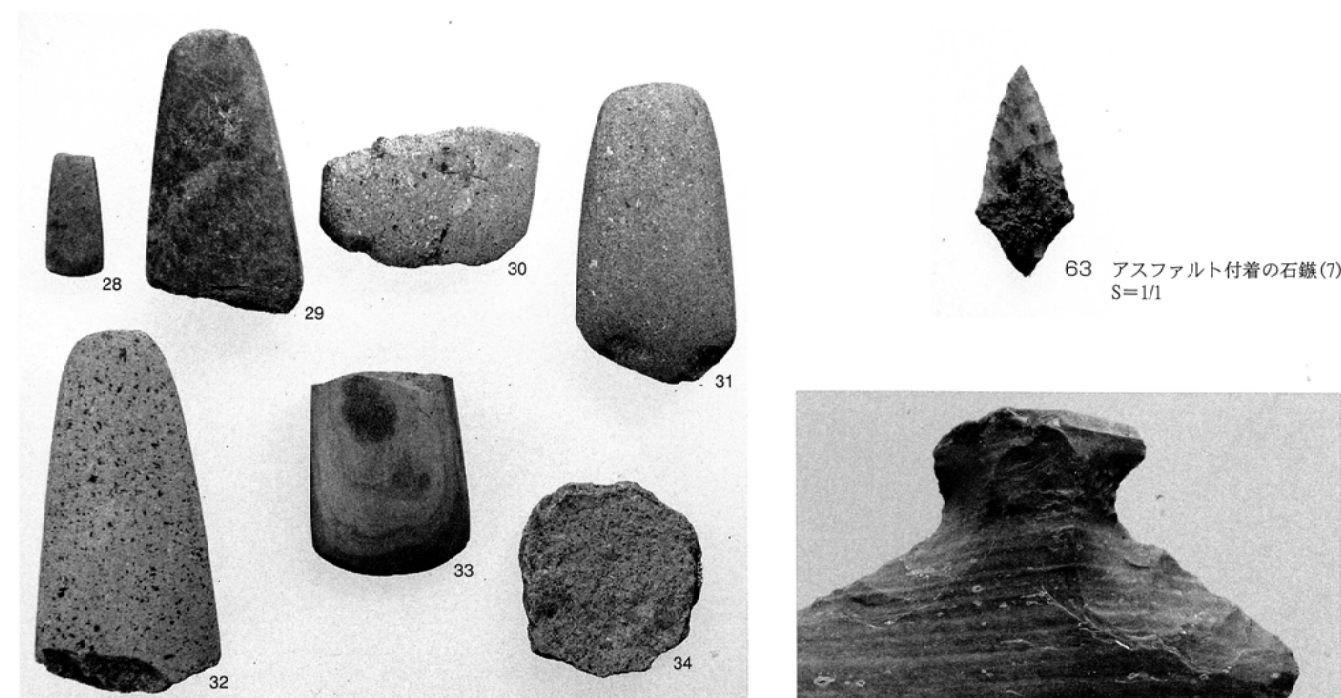


60 第Ⅱ調査区の出土土器と土製品 2 (120~157)

第Ⅱ調査区の出土土器と土製品

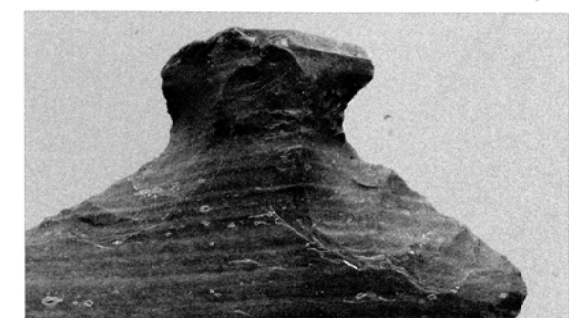


61 打製石器(1~27)



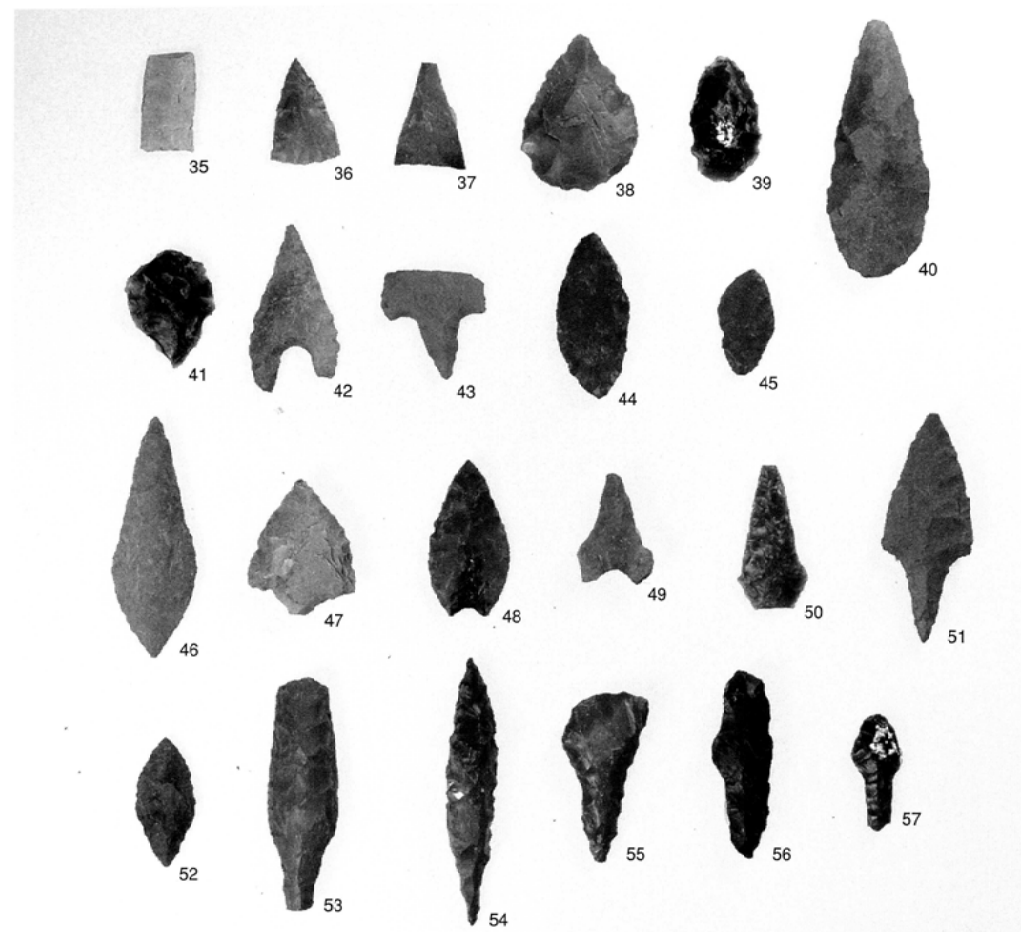
62 磨製石器と石製品(28~34)

63 アスファルト付着の石綴(7)
S=1/1

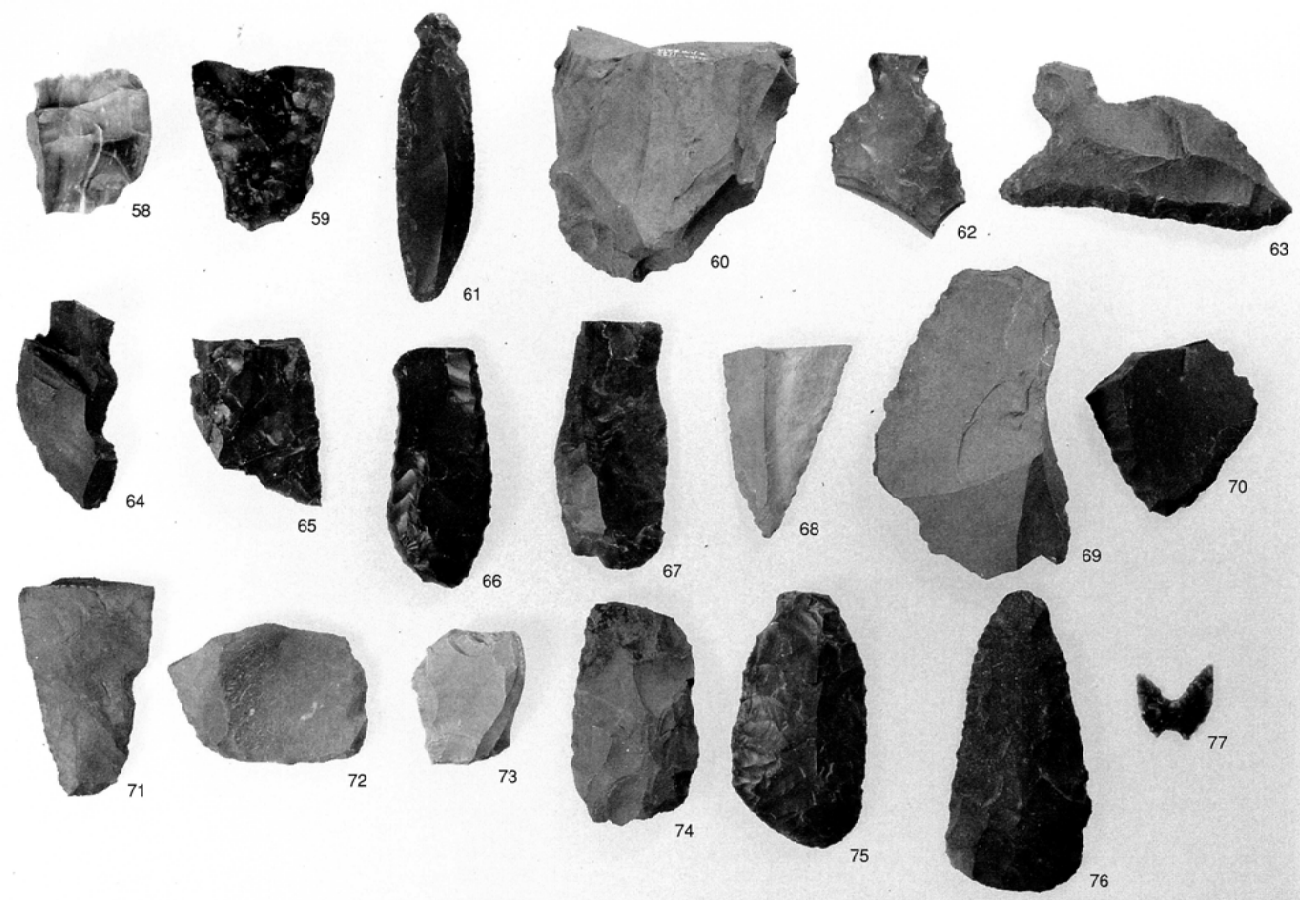


64 つまみ部に残るアスファルト(17)

第Ⅰ調査区の出土石器

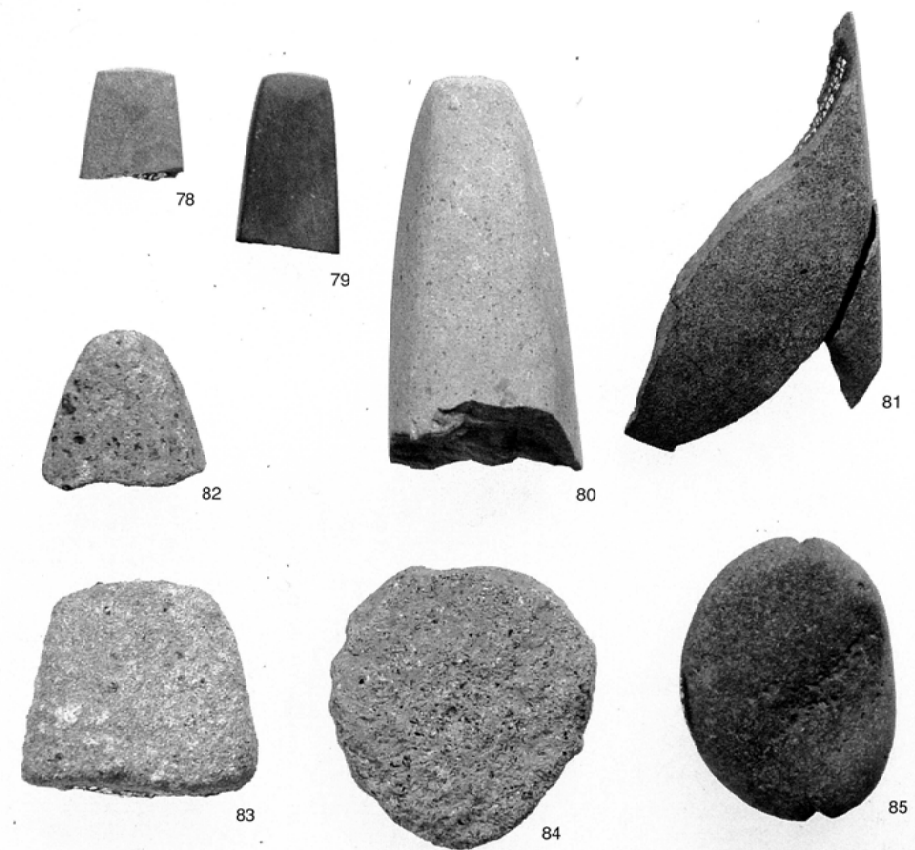


65 打製石器(35~57)

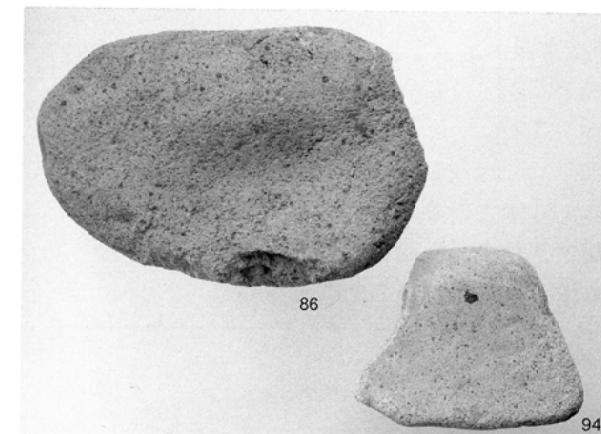


66 打製石器と石製品(58~77)

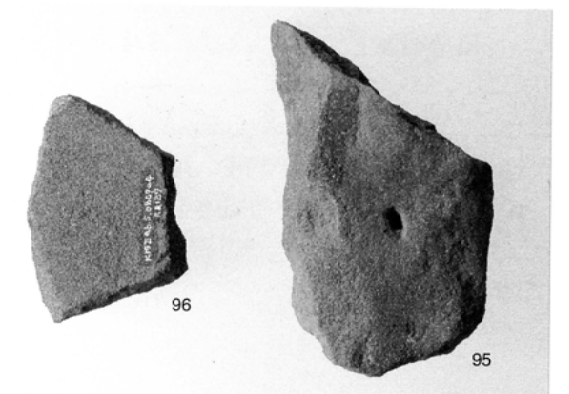
第Ⅱ調査区の出土石器



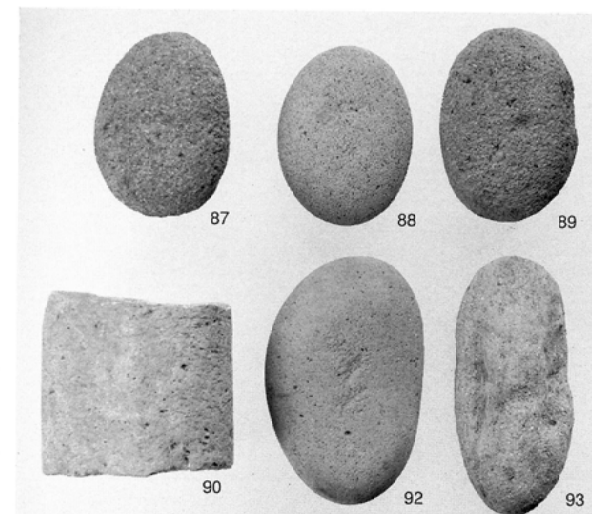
67 第Ⅱ調査区出土石器(78~85)



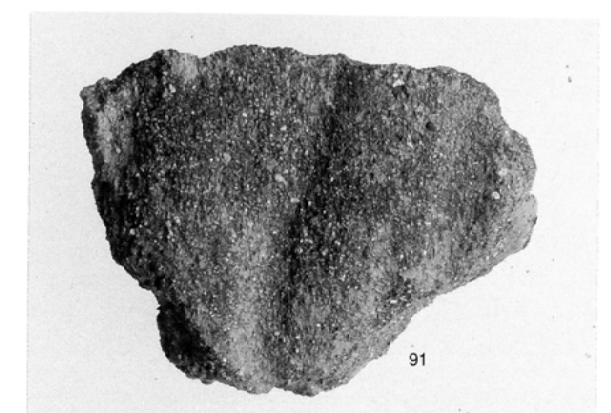
68 石皿(86-I区, 94-II区)



69 砥石(Ⅱ区)



70 (磨石・凹石・石棒)



71 砥石(ST3)

第Ⅰ・Ⅱ調査区の出土石器

報告書抄録

ふりがな	こやまざきいせきだいじゅうごじはくつちようさほうこくしよ
書名	小山崎遺跡第15次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	遊佐町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第8集
編集者名	佐藤禎宏 大川貴弘
編集機関	山形県遊佐町教育委員会
所在地	〒999-8301 山形県飽海郡遊佐町遊佐字舞鶴211番地 TEL 0234-72-5892
発行年月日	2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
	所在地	市町村	遺跡番号					
こやまざきいせき 小山崎遺跡	やまがたけん あくみ 山形県飽海 ぐん ゆざまち あく 郡遊佐町吹 ら あざなまがわ 浦字七曲・ なまがわいせきひがし 七曲堰東・ さいとばやし ほか 柴燈林 他	461	2214	39度 04分 18秒	139度 53分 26秒	20080715 { 20081015	143.0	重要遺跡確認のための 行政目的の 発掘調査

	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	集落跡	縄文時代	中期末葉の複式炉を 備える竪穴住居跡2軒 ST2: 前後5時期の重複 ST3: 前後3時期の重複	縄文土器 (早期末～晩期中葉) 石器 (異形石器他)	縄文時代中期末葉の 斜面地に造成された 竪穴住居跡検出。
要約	縄文時代中期末葉の大木10式期の複式炉を備える竪穴住居跡が、庄内平野に面する南向傾斜面地に地山の削平等を施して構築されていた。小山崎遺跡周辺一帯での居住域について、中期中葉の柴燈林遺跡から、末葉の段階での集落移転の様相が判明した。				

遊佐町埋蔵文化財調査報告書 第8集
小山崎遺跡第15次発掘調査報告書
平成21年3月31日発行

編集・発行 遊佐町教育委員会
〒999-8301 山形県飽海郡遊佐町遊佐字舞鶴211
Tel(0234)-72-5892 Fax(0234)-72-3314
印刷 株式会社 小松写真印刷
〒998-0102 山形県酒田市京田2-59-3
Tel(0234)-41-0011 Fax(0234)-41-0012

Yuza Town Archaeological Records No.8

KOYAMAZAKI SITE 2008

Yoshihiro SATŌ and Takahiro ŌKAWA eds.

March 2009

Yuza-machi the Board of Education, Yamagata Prefecture, Japan